

Title	フランス・ファシズムの思想と行動(3) : 火の十字架団からフランス社会党(PSF)へ(2・完)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2006, 56(2), p. 1-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/19669
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フランス・ファシズムの思想と行動(3)

―火の十字架団からフランス社会党 (PSF) へ(2・完)―

竹 岡 敬 温

5. 人民戦線との衝突

フランス社会党 (PSF) 結成後の数か月間、同党の党员およびシンパと人民戦線の活動家あるいは警察機動隊とのあいだで、何度も、激しい衝突事件が起こった。

最初の衝突は、1936年7月5日の夕方、エトワール広場で、凱旋門の下の無名戦士の墓への献火式のとき起こった。在郷軍人諸団体間の取り決めにしたがって、この日、火の十字架団が霊火をとす慣例になっていた。しかし、火の十字架団はもはや存在せず、全国在郷軍人連合パリ20区支部が代わりをつとめた。イバルネギャレーは、内相サラングロにたいして、合法主義を尊重するという約束をしていたので、いっさいのデモを禁止せざるをえなかった。ド・ラ・ロックは、かれに意見を求める人びとにたいして、「賢明な距離をとるという条件で、式典に出席するのを妨げない」が、しかし、「かれらがいかなる騒擾行為にも参加しないよう⁹⁴⁾」つよく要請していた。その日、デモの発生をとめるために、ド・ラ・ロックは腹心の部下たちをエトワール広場周辺に派遣した。憂慮すべき事態になった場合には、すぐかれを呼べるよう、かれの私設秘書のひとりがアストリア・ホテルの一室で見張っていた。

翌日の警察の報告によれば、違法な召集によって1万人が呼び集められ、激しい乱闘が起こり、107人の警官が負傷し、21人が逮捕され

たが、逮捕者の「ほとんどは解散させられた極右団体のメンバーであった。」警察機動隊は「3色のリボンを端にくくりつけたステッキを手にもつ数百人の青年たち」と激しくぶつかり、「フーケツの店の前では、“ブルムを殺せ、ド・ラ・ロック万歳”と叫びながら、すさまじい勢いで突撃隊が襲いかかってきた⁹⁵⁾」という。

1936年後半には、7月23日にサルトルーヴィル (イル・ド・フランス、イヴリヌ県) で、7月27日にはマルセイユで、9月4日にはアンジェとリヨンで、9月11日にはクレルモン・フェランで、9月13日にはエヴルー (ウール県) で、9月15日にはクレルモン・フェラン、リヨン、クーロミエ (セヌ・エ・マルヌ県) で、10月29日にはショワジー・ル・ロワ (パリの南、ヴァル・ド・マルヌ県) で、11月6日にはラ・フェルテ・スー・ジュアール (セヌ・エ・マルヌ県) で、11月21日にはグーサンヴィル (イル・ド・フランス、ヴァル・ドワーズ県) で、11月24日にはシェル (セヌ・エ・マルヌ県) で、フランス社会党 (PSF) と人民戦線勢力とのあいだで衝突が起こり、ときには混乱による死者も出た。1936年8月から1937年8月までに、両派の衝突で共産党の側にはひとりの犠牲者もなかったのにたいして、フランス社会党 (PSF) は死者4人を出した⁹⁶⁾。この死者数から考えて、フランス社会党 (PSF) のほうが守勢だったと判断できよう。

⁹⁴⁾ Cit. par J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.442, 1040.

⁹⁵⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, pp.442-443.

⁹⁶⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, pp.445, 447-448.

1936年9月13日のエヴルーでの衝突では、フランス社会党（PSF）のメンバーに向けて撃たれた弾丸を公安機動隊の4人の警官が受けて負傷した。9月15日、クレルモン・フェランとリヨンでは、30人の負傷者が出て、放火未遂事件も起こった。フランス社会党（PSF）の説明では、これらの衝突では、機動憲兵隊が「公平な態度と勇気」を示したのにたいして、地方警察は、「ほとんどの場合、襲撃者にたいしてあきらかに弱腰であった。」事実、どこでも、「警察はわれわれの味方だ」という左翼の叫びにたいして、フランス社会党（PSF）の党员たちは「軍隊はわれわれの味方だ」という叫びで応酬した。

ヴァカンスが終わった1936年9月以後、フランス社会党（PSF）はフランス全土で宣伝集会の開催数を増やしていったが、9月半ばには、ド・ラ・ロックは人民戦線側の対抗デモにはっきりと立ち向かう決意をし、そのことを内相サラングロにも知らせた。以後、宣伝集会の開催は秘密裡におこなわず公表され、これにたいして、人民戦線派は、毎回、「街頭での攻撃」を呼びかけた。

さらに、ド・ラ・ロックは内相に、「共産党の予想とは逆に、われわれは、個人的あるいは国民的な正当防衛の場合以外は、いかなる場合も暴力の使用を考えてはいません。しかし、われわれは、われわれの仲間の生存と市民としての宣伝活動を守る義務と厳正な権利を有しています。われわれの宣伝活動が平穏に続けられるかどうかは、一方ではわれわれの敵対者に、他方ではあなたにかかっています。責任をもつべきは、あなたです⁹⁷⁾」と警告した。

しかし、この平穏への訴えを政府は信用せず、逆に、ド・ラ・ロックが武力行使を準備していると信じたようであった。1936年9月24

日、ド・ラ・ロックはモンマルトルのムーラン・ド・ラ・ギャレットで集会を開いたが、400人の警官、500人の機動憲兵隊、50人の騎馬憲兵隊、15人の共和国衛兵小隊が会場を取り巻いた。その10日後、パリ18区の人民戦線委員会が同じ場所で集会を開いた。しかし、両日とも衝突は起こらなかった⁹⁸⁾。また、9月26日には、官房長官アンドレ・ブリュメルのもとに、匿名の友人から、「きわめて確かな筋からの情報によれば」、ド・ラ・ロックの「個人的番人」で元火の十字架団のヴェルサイユ支部長が、夜中にかれの部下を集め、セヌ・エ・オワーズ県の他の支部とともに、パリの電話局を占拠する計画を立てていることを知らせた手紙⁹⁹⁾が届き、政府を緊張させた。

人民戦線との衝突が数週間続いたあとの1936年9月末、ド・ラ・ロックは、仲間たちに、「マルクス主義の明白な危険」にたいして「全員の奮起¹⁰⁰⁾」を促した。かれはわざと敵対者とその縄張りにおいて挑発しようとし、10月2日、パリ最大の集会場、冬季競輪場にフランス社会党（PSF）の党员4万人を召集することを決定した。左翼はこれに激しく抗議した。冬季競輪場はパリで「もっともプロレタリア的な地区」の心臓部であり、左翼勢力の大聖堂であった。

これにたいして、共産党と社会党との地区連絡委員会が対抗デモを呼びかけたので、内相は、10月2日午前2時、両派の集会禁止を決定した。そのため、共産党は、10月4日、日曜日に、パリ16区のプランス公園のスタジアムに党

⁹⁸⁾ *Archives de la préfecture de police de Paris*, pièce non cotée; J. Nobécourt, *ibid.*, pp.449, 1042.

⁹⁹⁾ *Archives de la préfecture de police de Paris*, lettre du 25 septembre 1936; J. Nobécourt, *ibid.*, p.449.しかし、ド・ラ・ロックは「個人的番人」とよばれるようなボディ・ガードをもってはいなかった。

¹⁰⁰⁾ Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives De La Rocque*, Ligue dissoute, interrogatoire du colonel, 4 décembre 1936, pp.21-22; J. Nobécourt, *ibid.*, pp.466, 1043.

⁹⁷⁾ *Archives Nationales*, fonds privés 451, dossier 118, cote 136; J. Nobécourt, *ibid.*, pp.449, 1042.

員とシンパを召集した（政府はこの集会を許可したが、社会党は不参加を決定した）。共産党の集会には、おそらく、16区のブルジョワたちが火の十字架団に加入するのを思いとどまらせようというねらいがあったのであろう。

フランス社会党（PSF）の党員たちは、右翼の集会が禁止され、左翼の集会が許可されたことに「デュクロ＝ブルム協定」の結果をみ、共産党の集会が許可されたのは同党と政府が取り引きしたためであり、「共産党議員たちは、フランス社会党（PSF）の解散とド・ラ・ロックの逮捕と引き換えに、国会で平価切下げに賛成投票したのだ¹⁰¹⁾」と憤慨した。フランス社会党（PSF）は、フランス公園周辺での対抗デモを呼びかけた。

しかし、ド・ラ・ロックは、「軍隊的あるいは準軍隊的な外観をいっさい避ける」ために、「だれも火器を携帯してはならず」「対抗デモは粘り強く平静におこなわなければならない¹⁰²⁾」（10月3日の通達）と指令した。正面衝突を避けるために、フランス社会党（PSF）の党員たちはスタジアムにはいることは禁止された。

当日、パリの警視総監は機動憲兵隊260小隊（すなわち隊員数約1万人）、共和国パリ衛兵隊、パリ市警分遣隊を含む2万人以上の警備隊と（アンリ・ド・ケリリスによれば¹⁰³⁾）機関銃装備の装甲自動車を出動させた。警視庁の飛行機が、セーヌ川とブローニュの森のあいだを何度も旋回した。

しかし、両派（共産党とフランス社会党）のデモ隊のあいだで衝突は起こらず、死者も出なかった。しかし、その前夜、政府は極度におびえていた。内相サラングロは「2月6日事件」の再発を危惧し、レオン・ブルムは、私用で滞

在していたジュネーヴから内相にしつこく電話し、夜半にはパリに戻ってきた。

この日、正午、機動憲兵隊に「護衛」されて、フランス社会党（PSF）の分遣隊がオートゥイユ街を通過してフランス公園界隈をデモしはじめた。騎馬憲兵隊がデモ隊員の縦隊を輪切りにし、細い街路ごとに敷かれた警官隊の非常線のほうにかれらを追い払おうとしているあいだに、共産党員たちが警官たちに保護されてバスで到着した。午後4時頃まで、ポルト・ドートゥイユとサン・クルーのあいだで乱闘が散発的に発生し、パリ16区の市議員のひとりが負傷し、警官ひとりが瓶でなぐり倒された。

午後5時、共産党は集会を終え、党員たちは三三五五会場から出てきた。かれらは赤旗をケースにしまいこみ、フランス公園の出口にいたフランス社会党（PSF）の党員たちの攻撃を受けることもなく、警官の列のあいだを通過して地下鉄の入り口に吸い込まれていった。両党のあいだでは衝突はなかった。

しかし、シャンゼリゼ大通りで、フランス社会党（PSF）の党員たちの一部と政府側の警備隊とのあいだで、事件のあらたな展開があった。ノルマンディーから応援にやってきたフランス社会党（PSF）支部党員たちにフランス公園からきた仲間たちが合流したデモ隊が、凱旋門からコンコルド広場へ下りていこうとして、警備隊と衝突した。数軒のカフェがテーブルや椅子をひっくり返され、20台ほどの自動車が被害を受けた。1,249人が逮捕され、そのうちの10人ばかりが武器不法所持のことで身柄を拘束された。警備隊側は5人の警官が負傷し、そのうちの2人は病院に運ばれた。

フランス公園の対抗デモが——宣伝集会の数を増やし、共産党に立ち向かう党の力を示すという——ド・ラ・ロックの新しい戦術の端緒となったとき、力と力の対決の危険があきらかとなった。

1936年10月4日にフランス公園周辺で発生し

¹⁰¹⁾ *Le Flambeau*, 10 octobre 1936.

¹⁰²⁾ *Archives départementales de la Seine*, 212/69/1, art. 150, cotes 1660-1693; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.468, 1044.

¹⁰³⁾ Henri de Kerillis, *L'Echo de Paris*, 5 octobre 1936.

たこれらの出来事は、まもなく人びとの集合的記憶から消え去ったが、1937年3月16日の晩の「クリシーの銃撃事件」は、とくに左翼の人間の記憶のなかでは、「潜在的内戦」のこの時期に起こったもっとも堪えがたい衝突事件のひとつとして長くとどまった。事件のあらまし¹⁰⁴⁾は、つぎの通りである。

フランス社会党 (PSF) クリシー支部は、1937年3月16日に、同市のオランピア映画館で、シャルル・ボワイエとアナベラ主演の映画「戦闘」を上映する夜の集いを計画した。それは慈善の集いであり、政治的スピーチもおこなわれず、「無害で、ほとんど家族的な集い」(レオン・ブルム)であった。その晩、クリシーのオランピア映画館には400人の男、80人の女、10人の子供(そのうちの数人は幼児)が集まった。

しかし、パリ郊外の「赤い地帯」に設置されたフランス社会党 (PSF) 支部が集会を開くときには、人民戦線が支配する市(町村)当局はきまってフランス社会党 (PSF) の「挑発」を非難し、対抗デモを呼びかけた。パリ北西の工業都市で、社会党の市長と共産党の下院議員を選出し、人民戦線の砦のひとつであったクリシーも、例外ではなかった。3月16日にド・ラ・ロックが来るといううわさを「挑発」と感じた市当局は、内務省に集会の禁止を要求した¹⁰⁵⁾。満足な回答がえられなかったので、共産党代議士オネル、社会党市長オーフレ(元共産党員)、県会議員ネールは、市の告知板に掲示を張り、市民たちに、市役所前で午後7時に抗議集会を開くよう呼びかけた。もう一枚の掲示には、人民戦線委員会の署名があった(ド・ラ・ロックの出席は、抗議者の想像の産物であった。対抗デモはデモを前提としているが、

私的な映画会には対抗デモの対象になるような性質はなく、事件後、レオン・ブルムは国会で、「クリシー市民への呼びかけは、わたしの考えでは、誤りであり、過失以上に悪いものである」と語ることになる)。

映画館と対抗デモの隊列とのあいだに、騎兵中隊と45人の機動憲兵隊歩兵小隊を含む1,800人の機動隊が割って入った。映画館は終日、フランス社会党 (PSF) のメンバーによって警護され、観客は午後6時30分頃バリケードを避け回り道して映画館にはいり、午後9時15分、警備員の指揮者の指示にしたがって退去した。ド・ラ・ロックは来なかった。フランス社会党 (PSF) にとっては、それですべてが終わり、市役所を攻撃するという計画もなかった。

対抗デモ隊は、市役所前広場周辺に、午後6時には500人を集め、2時間後には人数は3,000人になった。デモ行進をしたあと、8,000人ないし9,000人にふくれあがったかれらは、午後9時頃、映画館を防備していた警察の非常線と向き合った。デモ行進のあいだ、機動隊とのあいだで衝突が起こり、鉄斧と舗石を浴びせかけられた警官たちは銃撃で応酬した。通報を受けて内相とともに現場に駆けつけた官房長官アンドレ・ブリュメルは、80人の警察の増援部隊がかれらを運んできた車から降りたとき、市役所の玄関付近で突然起こった一斉射撃のなかで、2発の弾丸を(一発は腿に、もう一発は腋の下に)受けて倒れた。ブリュメルの生命に別条はなかったが、このときの銃撃によって6人が死亡し、約300人が負傷した。衝突は短時間でおさまったが、深夜には、「解散させられた火の十字架団のメンバーだった」肉屋とタバコ屋が、かれらの家から銃を撃っているのがみられたといううわさがまき散らされた。

事件の要点は、翌日、国会で、首相レオン・ブルムによって、正確に、しかし、社会党と共産党がこの事件にあたえた解釈に配慮し、多少の手加減を加えて報告された¹⁰⁶⁾。ブルムは、

¹⁰⁴⁾ Cf. J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.509-514; R. Soucy, *op. cit.*, pp.116-117, (traduction française) *op. cit.*, p.150.

¹⁰⁵⁾ Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives De La Rocque*, Ligue dissoute, correctionnelle 14-12-37, fascicule 4, p.19 et plaidoirie Olivier, fascicule 6, p.46; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.511, 1047.

「クリシー事件」を「悲劇」とよんで悲しみ、内務省総監アルマン・アンベールに、この悲劇の調査を命じた。

だれが銃を撃ったのか。レオン・ブルムは国会で「激しい争いのさなかに現場に到着してつぎつぎと車から降りた警官たちは、指揮者もなく、たがいのあいだの連絡もなく、警備隊の指揮官との連絡もなく…個人的な判断で、あたかも各自が正当防衛の状態にあるかのように感じて行動したのです。わたしとしては、指揮官のもとに組織された武装警官隊にとっては、正当防衛の権利は存在しえないと考えます」とのべて、間接的に警官隊に嫌疑をかけた。こういったあと、ブルムは、事件の調査に当たったアンベール総監の報告——銃撃命令が発せられたことはなく、警官たちはおそらく「個人的に行動した」のだということを確認したあと、「弾薬検査ができないので、理論的には、どの警官も、いかなる場所でも、いかなる瞬間にも銃を撃ったことはないという不条理の前に立ちとどまらざるをえないのは、きわめて不快なことである」という奇妙な主張をつけ加えた報告——を要約した。

「クリシーの犯罪的襲撃」についてのアンベール総監の報告は、狂乱した雰囲気、途方もない「失態」、警察幹部の明白な義務不履行を語ってはいたが、しかし、いかなる結論も下さず、事件は1939年2月4日に免訴に決まった。

事件翌日の1937年3月17日、『ル・ポピュレール』（社会党機関紙）と『ユマニテ』（共産党機関紙）は、「労働者の血を流した」のは「元火の十字架団」であると書き、社会党員と共産党員に24時間のゼネストの決行を呼びかけ、ド・ラ・ロックを扇動罪で逮捕するよう要求した¹⁰⁷⁾。こうして、「クリシーの銃撃事件」

は政治的かけひきの様相を帯びるにいたり、そのために、まもなく、実際になにが起こったのか真相がみえなくなった。3月21日、サン・ドニ郊外からクリシーまで、7時間にわたって、100万の人びとが6人の犠牲者の葬列を見送った。

事件は、「ファシストの首領」ド・ラ・ロックにたいする敵意と憎しみのなかで、「死者の栄誉」をたたえる左翼の労働者大衆によって、はばかりどころなく政治的に利用された。そこに打算はなく、疑いもなかった。かれらにとっては、クリシーで「畏を仕掛け、民衆と警察と一緒に落としいれた¹⁰⁸⁾」のは、もちろんド・ラ・ロックであった。

レオン・ブルムも、国会で、ド・ラ・ロックとフランス社会党（PSF）が「ここ3年来、国じゅうに引き起こされた異常事態」、クリシーの事件を可能にした「興奮状態」に責任があることをほめかし、「労働者の血が流されたにもかかわらず、労働者階級がそれを政府や議会の責任にせず、そしてたぶん政治体制の責任にもせず、流された血が民衆階級と合法的共和制とのあいだに溝を穿つことがなかったのは、この国の社会史上はじめてである、とわたしはほしい」とのべた。

6. 自由戦線をめぐって

1936年の総選挙で人民戦線が勝利した直後、右翼の側でも、左翼連合に対抗して、反マルクス主義勢力の連合を組織することが必要であると考えられるようになった。共和派連盟（委員長ルイ・マラン）の全国評議会は、下院と上院における超党派野党会議の設立を提案し、この結果、毎週1回会合をもつため、全野党グルー

¹⁰⁶⁾ *Journal officiel*, Annales de la Chambre des députés: Débats parlementaires, 2^e séance du 23 mars 1937, pp.1191-1202.

¹⁰⁷⁾ Ph. Machefer, *Le Parti social français en 1936-1937*, p.76.

¹⁰⁸⁾ Claude Jamet, *Le Front populaire de la Vienne*, mars 1937, cit. in Claude Jamet, *Notre Front populaire, journal d'un militant, 1934-1939*, La Table Ronde, Paris, 1977, p.189.

プの代表団が組織された。また、80万人の会員数を誇っていた全国在郷軍人連合（UNC）は、1936年5月、全国反革命連合結成の願望を表明し、6月の極右同盟解散後は、そのあとを引き継がねばならないと考えたようであり、7月21日の集会で、ジャン・ゴワ委員長が「共産主義への道を阻止しようとするすべてのフランス国民の連合」を呼びかけた。

同じ時期、同様の目的をもって、フランス社会党（PSF）が結成されたが、この新しい党によって、ド・ラ・ロックは、議会制度の枠内で、火の十字架団の反共産主義連合の構想を追求するという戦術を選択した。

結成後まもなく、フランス社会党（PSF）の党員数は、火の十字架団時代の団員数を越え、控え目に見積もっても、1936年末にはたぶん60万人から80万人に達したとおもわれる¹⁰⁹⁾。それは、共産党と社会党を合わせた党員数を上回り、他の反共組織の指導者たちの大きな関心を引くに足る数字であった。

全国在郷軍人連合（UNC）の反共産主義フランス国民連合の呼びかけに応じて、同様な連合の形成を使命とするフランス社会党（PSF）の結成に加えて、1936年6月末、ジャック・ドリオのフランス人民党が創立され、火の十字架団からの転向者たちのような、共和制にもっとも敵対的で、ファシズムの方法とイデオロギーに魅惑された政治分子を引き寄せた。

1936年7月末、全国在郷軍人連合（UNC）の委員長ジャン・ゴワは、「ナショナリスト」の新聞主宰者たちに宛てた手紙のなかで、「個人の自由の保護、国の独立、私有財産の観念の尊重、民主主義制度の擁護を保証するための¹¹⁰⁾」共同行動の方式を協議する会議の召集を提案した。これにたいして、ド・ラ・ロック

は、共和制の尊重と労働者の既得権の尊重という2つの原則を提案した¹¹¹⁾。前者はフランス社会党（PSF）の運動を議会制民主主義の制度のなかに統合していくという新しい方針に対応したものであり、後者は1936年夏の労働運動の高まりとフランス社会党（PSF）の社会的野心という文脈のなかで主張されたものであった。

1936年10月に全国在郷軍人連合（UNC）があらたな呼びかけをした結果、同連合とフランス社会党（PSF）とのあいだで合意に達し、両組織は、パリおよび各県で、「モスクワの行動を告発し、内戦を準備し全般的な国際紛争にわれわれを引きずり込もうと望んでいるものたちの戦意を殺ぐため¹¹²⁾」、地方レヴェルの協定を促進することを決定した。しかし、この地方協定は両組織のそれぞれに完全な独立性をあたえていた。

こうして、全国在郷軍人連合（UNC）とのきわめて限定的な合意は、ジャン・ゴワによって最初に提案された広範な連合を導くまでにはいたらず、その後、同連合とフランス社会党（PSF）との絆も急速にゆるんだ。1937年3月、人民戦線政府が巨額の国防債を発行したとき、全国在郷軍人連合（UNC）がそれを「良識の勝利」とよんで喜んだのにたいして、フランス社会党（PSF）は、「国を愛する人びとは、最大の疑念を抱かれるべき内閣を信頼するか、それとも愛国的防衛のジェスチャーに同意しないかの、恐ろしいジレンマに置かれている¹¹³⁾」とのべて、国防債発行の「邪悪なマキアヴェリズム」を告発した。

これらの動きと時を同じくして、1936年11月9日、フランス人民党の第一回大会で、ジャック・ドリオが、「ソ連の独裁に反対する市民と軍人の、都市住民と農民の、左翼と右翼のすべての勢力」の結集をめざした「自由戦線」の名

¹⁰⁹⁾ フィリップ・マシュフェールによれば60万人、ジャック・ノベクールによれば80万人。Ph. Machefer, *L'Union des Droites, le P. S. F. et le Front de la Liberté, 1936-1937*, p.113; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.571.

¹¹⁰⁾ *L'Echo de Paris*, 30 juillet 1936.

¹¹¹⁾ *Le Flambeau*, 19 septembre 1936.

¹¹²⁾ *Le Flambeau*, 24 octobre 1936.

¹¹³⁾ *Le Flambeau*, 23 mars 1937.

をはじめあげた。

ついで1937年3月27日、ジャック・ドリオは、フランス人民党の日刊機関紙『国民解放』の論説で自由戦線の結成をふたたび提案し、5月8日、同紙上において、つぎのような言葉で結成趣旨を説明し、反共産主義連合の必要を主張した。「周知のように、共産主義に反対するフランス人はかならずしも共通のプログラム、共通の思想、共通の哲学的あるいは宗教的理念をもってはいないが、かれらの平和的共存は自由の存在によって保証されてきた。それがいまでは危機にさらされている。そのため、フランスは、いまや、右翼と左翼とに分裂する以上に、共産主義者と反共産主義者とに分裂している…いまこそ、すべてのフランス人が団結しなければ、少数の共産主義者が、厚顔にも、この国を横領するおそれがある。われわれがフランスのもろもろの自由を守ろうと願うすべての人びと、すべての政党を結集した自由戦線の結成を提案するのは、そのためである¹¹⁴⁾。」

これにたいして、1937年4月24日の『ル・フランボー』紙で、ド・ラ・ロックは自由戦線の問題についてはじめてかれの見解を発表し、「それが一時的な“連合”や、行動をとまわらないおしゃべりの交換などではなく、あらかじめしっかりした基礎が据えられたものであるならば、わたしはその価値を過小評価しない¹¹⁵⁾」とのべた。そこには、すでに自由戦線の結成にたいするフランス社会党 (PSF) のためらいが示されていた。

フランス社会党 (PSF) の党員数は70万人前後、これにたいしてフランス人民党の党員数は、同党第一回全国大会 (1936年11月9-11日) で公表された数字によれば、10万人であり¹¹⁶⁾、中心の固い核を構成する積極的な活動家たちだけを比較すれば、不均衡はもっと小さく

なろうが、両党の力関係はあきらかにフランス社会党 (PSF) に有利であった。

しかし、フランス人民党は、その内部にド・モーデュイ、ポプラン、ピュシューらのような火の十字架団からの転向者たち、ド・ラ・ロックの「臆病」を非難し、かれから離反した者たちがいて、フランス社会党 (PSF) の一部のメンバーにたいしてある種の引力をもっていた。フランス人民党第一回大会の開催時には、7人の政治局メンバーのうちのひとり (イヴ・パランゴ) は国民義勇軍の元メンバーであり (比率にして14パーセント)、740人の代議員のうち23人が火の十字架団の、68人が国民義勇軍の元メンバーであった¹¹⁷⁾ (12パーセント)。これらの12ないし14パーセントという比率を党全体に移し換えるならば、フランス人民党の党員数が第一回大会後には12万人程度になっていたとして、このうちの1万4,000人から1万5,000人が火の十字架団あるいはフランス社会党 (PSF) からの転向者であったということになろう¹¹⁸⁾。数字の正確さは検証不能であるが、これらの推定値によっておよその大きさを知ることができよう。事実、フランス人民党はフランス社会党 (PSF) にたいして潜入工作を続け、メンバーを引き抜こうとしていたようであり、何度も繰り返し、ド・ラ・ロックは、ドリオが火の十字架団の元団員を使ってフランス社会党 (PSF) の支部に潜入工作をおこなっていると、その「礼儀知らずで非友好的な態度」を非難した¹¹⁹⁾。

ドリオが『国民解放』紙上で自由戦線結成の呼びかけをした (1937年3月27日) と、その心理的効果はただちにあらわれた。1937年4月

¹¹⁴⁾ *L'Emancipation nationale*, 27 mars 1937.

¹¹⁵⁾ *Le Flambeau*, 24 avril 1937.

¹¹⁶⁾ *L'Emancipation nationale*, 14 novembre 1936.

¹¹⁷⁾ Dieter Wolf, *Doriot. Du communisme à la collaboration*, Fayard, Paris, 1969, pp.186-187, 190, 平瀬徹也・吉田八重子訳『フランスファシズムの生成 人民戦線とドリオ運動』風媒社, 1972年, pp.193-194, 198-199.

¹¹⁸⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, p.571.

¹¹⁹⁾ *Bulletin d'information du PSF*, no.19, 16 février 1937.

10日、フランス人民党は黨員数が18万人になったと発表した。先述の12パーセントという比率を適用するならば、さらに元火の十字架団もしくはフランス社会党 (PSF) のメンバー7,200人が、ドリオの魅力に惹かれて、フランス人民党に走ったということになる。このような状況にあったから、フランス社会党 (PSF) の指導者たちは、自由戦線をフランス人民党の新しい策謀と解釈したのかもしれない。ド・ラ・ロックは、フランス社会党 (PSF) のメンバーのあいだに自由戦線への加盟者のリストがひそかに配布されていることに不満を漏らした。

『ル・フランボー』紙にはじめて自由戦線にかんする見解を発表した翌日の1937年4月25日、ロデズで開かれたフランス社会党 (PSF) アヴェロン県支部大会で、ド・ラ・ロックは、ドリオにたいする最初の公式な回答を発表し、「国民戦線であれ、自由戦線であれ、単一戦線であれ、それは見せかけや言葉だけであってはならない…それは、どんな状況においても、現行の制度の擁護と祖国の防衛をめざして、いかなる地平からやってきた人であろうと、すべての人びと、すべての勇気ある人びとのグループを結集するものでなければならない」とのべ、共産主義とその同調者に反対するすべての政党の党首に、選挙で単一候補を立てるため選挙協定を将来結ぶことを提案した。さらに、意見の交換は「共和制の制度という唯一の枠のなかで」おこなわれるべきだとし、その参加者は他党からの引き抜きをしたり、「他の組織を不当に支配」したりしないことを約束するべきだとした¹²⁰⁾。

5月2日のフランシュ・コンテ支部、5月12日のブザンソン支部の大会でも、ド・ラ・ロックは、この「ロデズのアピール」と右翼連合結

成の条件（共産主義に反対する政党間相互の規律、一政党の他の政党にたいする内密な不正行為の禁止、選挙戦においては第一回投票から単一候補を立てるための努力）を繰り返し、相互的規律の約束がなければ、フランス社会党 (PSF) は自由戦線を支持しないとのべた¹²¹⁾。ドリオは答えなかった。

1937年5月8日、冬期競輪場での集会において、ジャック・ドリオは、自由戦線の結成を正式に表明し、あらためて「人民戦線にたいする反マルクス主義連合」を呼びかけ、共通のプログラムとして、5つの自由、すなわち労働の自由、表現の自由、思想の自由、出版の自由、商業の自由の擁護と現行制度の尊重を提案した。かれは「現行の制度にはなおフランスの状況を立て直す力があるので、その可能性、そのチャンスに賭けなければならない。現行の制度にそれと両立できなくはない自由と権威を回復させる可能性をあたえなければならない¹²²⁾」とのべた。共和主義の制度を非難する言葉はなかった。多くの論者によってフランス最大のファシスト団体と目されているフランス人民党のリーダーの、表現や思想の自由と共和制を守ろうという主張には、いささかのパラドックスとある種のおかしさを感じないわけにはいかない。

この集会に先立って、共和派連盟（委員長ルイ・マラン）と国民社会共和党（元愛国青年同盟）が4月24日、右翼連合結成のための調整委員会の設立協定を結び、フランス社会党 (PSF) にもこれに加わるよう提案する¹²³⁾一方で、ルイ・マランはドリオにもっと明確なプログラムの作成を要求した。

これにたいして、人民民主党のシャンプティ

¹²¹⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, p.573.

¹²²⁾ Cit. par J. Nobécourt, *ibid.*, p.574.

¹²³⁾ Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives De La Rocque*, II, A6, ド・ラ・ロックの補佐役ルネ・リシャールからフランス社会党 (PSF) 政治局長エドモン・バラシャンに宛てた1937年5月4日付の手紙。J. Nobécourt, *ibid.*, pp.574, 1055.

¹²⁰⁾ Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives De La Rocque*, X, C2a, 1937, discours de La Rocque, bulletin no.29, 27 avril 1937; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.573, 1055.

エ・ド・リブは、フランス国民を2つの陣営に分裂させるすべての「戦線」に反対し、かれが作りたいたいとおもっているのは「すべての共和主義者との共同戦線」であるとのべ、2つの政党——そのひとつはファシズムとヒトラー主義への共感を隠さないドリオのフランス人民党であり、他のひとつは自由戦線結成の受諾に慎重な留保条件をつけているルイ・マランの共和派連盟である——の「貴賤結婚」から逃れようとした。フランス農民党は、ドリオの呼びかけに好意的な回答を寄せた。

自由戦線の結成は、もしそれが人民戦線の結束を壊すことができるならば、成功であろう。そのため、右翼と極右の関心は、ブルム政府の遭遇している困難を前にして急進党が示すであろう動揺に向けられた。ジャック・ドリオは、「急進党は、自由を守るためには、共産主義と戦わなければならない。共産主義と戦うためには、ナショナリストと団結しなければならない¹²⁴⁾」とのべた。けれども、人民戦線からの急進党の離脱は、この時期には、まだ期待できなかった。

共和派連盟は、自由戦線を単一の組織にはせず、それが同党の議員全員の再選を保証することを条件に、参加を決定した。一方、フランス農民党は、ごく小さな集団にすぎなかったが、同党の名で表明していた好意的な回答を撤回した。ピエール・エティエンヌ・フランダンの民主同盟は、急進党の不参加を理由に、参加しなかった。人民民主党は、自由戦線の結成は内戦のムードを国内に持続させることになろうとして、参加を拒否した。

これら少数の、しかも小さな政党の連合だけでは不十分であった。自由戦線の成功は、とりわけ、最大の党員数を擁するフランス社会党(PSF)の態度にかかっていた。しかし、フランス社会党(PSF)はその態度を保留しつづけ

た。

ロワール県選出の下院議員ポール・クレセール(人民戦線非加盟の独立民主急進左派に属し、1936年の選挙で火の十字架団の支持を受けて当選し、フランス社会党に入党)は、ジャック・ドリオに宛てた手紙のなかで、フランス社会党(PSF)は地方レヴェルの協定を拒否しないであろうが、恒常的な同盟を結ぶことはできないと告げ、たがいに手を結ぶことができない事情を、つぎのように、教義上の理由によって説明している。「マルクス主義にたいする戦いは、必要だが、しかし、それは“否定的な”戦いで、われわれの行動の本質をなすものではありません。われわれの行動の本質、それは、階級闘争を排除し、市民的奉仕の規律を確立し、職業労働を組織し、このようにしてつくられた新しい構造とその経済的役割に共和制国家を適合させることをめざす、道徳的、社会的、政治的秩序における“肯定的な”革命なのです¹²⁵⁾。」

クレセールの文章は、あいまいな表現ではあったが、たんに反共産主義をめざした政党の結集の“否定的”性格を的確に示すものであった。たしかに、反ファシズムが人民戦線の「きずな」であったのとまさしく対照的に、反共産主義は中道派から極右までのきわめて異なった組織をつなぐ唯一の「きずな」であった。しかし、フランス人民党との連合は、ファシズムの嫌疑をかけられていたフランス社会党(PSF)をまちがいに危険に巻き込むであろうとおもわれ、クレセールも、ドリオ宛ての手紙のなかで、「自由戦線は、その敵対者には、ファシストの共同戦線とみられるでしょうし、それはむしろ人民戦線を強化し、フランスを2つの陣営に分裂させることになりましょう」とのべていた。フランス社会党(PSF)は、自由戦線を、その反動として、人民戦線の団結をかえって強

¹²⁴⁾ Cit. par Ph. Machefer, *L'Union des Droites, le P. S. F. et le Front de la Liberté, 1936-1937*, p.120.

¹²⁵⁾ *Le Flambeau de Flandre-Artois-Picardie*, 15 mai 1937.

化するであろう右翼連合とみたのであった。

1937年5月21日の『グランゴワール』紙に掲載されたインタビューのなかで、ド・ラ・ロックはフランス社会党 (PSF) の立場をあきらかにし、「フランス社会党 (PSF) の名において、わたしが実質的価値をもたない計画を支持し、それに参加することができるには、フランスでは、あまりにも多くの希望が失望に変わってしまいました」といい、とりわけ、フランス社会党 (PSF) は、「自由戦線への参加によって、予見能力のない古い組織や古い人びとの価値回復に奉仕する」ことを望んではいないとのべた¹²⁶⁾。ド・ラ・ロックは、指導者たちの分裂と硬化症によって、人民戦線の政権掌握を許した古典的右翼を非難したのであった。

同時に、フランス社会党 (PSF) 書記長フィリップ・ヴェルディエは、5月19日付の同党執行委員会の決定をジャック・ドリオに伝え、あらためて、フランス社会党 (PSF) と共産主義に反対する他の政党とのいっさいの取り決めの前提として、ド・ラ・ロックが提示した全条件の全面的承認を要求した。フランス社会党 (PSF) 政治局長エドモン・バラシャンと同党下院議員フェルディナン・ロップとが交渉に当たるよう指名された。

1937年6月9日、フランス社会党 (PSF) は臨時全国評議会を召集し、ドリオの提案を検討した。そこに提出されたロップ議員の報告は、既製右翼の「議員たちの一部がセクト的で偏狭な保守主義を代表している」のにたいして、フランス社会党 (PSF) は「新しい強力な政党であり、フランス政界に重要な役割を演じるよう運命づけられた、第一級の国民的で社会的な勢力である」とのべ、「われわれは現在、ひとつの実験の終わりに立ち会っている。その実験をおこなった与党は、その極左からの右派の離反を勇気づけることのできる風土のなかでしか崩

壊しないであろうが、自由戦線の風土は、逆に、この崩壊の過程を阻止するものである」と結論した。

ロップの報告は、あらためて、フランス社会党 (PSF) が「極右」という刻印を押されることを拒否し、あまりにも基礎の偏狭な連合のとりこにならないよう注意を促し、人民戦線のなかの穏健派分子を、フランス社会党 (PSF) がその力相応の役割を演じるであろう、広範な反共産主義連合のなかに引き入れようという意志を表明して、ファシズムの傾向をもった右翼の結集は人民戦線勢力を結束させるだけであろうと主張した。この結果、フランス社会党 (PSF) 全国評議会は、自由戦線が人民戦線の崩壊をむしろ食い止めるための連合にしかかなりえず、「フランス社会党 (PSF) の200万のメンバーが自由戦線に加盟するならば、党全体からフランス国民の和解が最大の目標というその特徴を奪い取り、意志に反して、党全体を内戦の道具とおもわせてしまう危険がある」と考えて、参加拒否を決定した¹²⁷⁾。

結局、議会レヴェルでは、自由戦線は、248人の野党 (人民戦線非加盟政党) 議員のなかで、わずかに——共和派連盟の59人¹²⁸⁾にドリオとティクシエ・ヴィニャンクールを加えた——61人の議員をもったにすぎなかった。

1937年6月20日、ド・ラ・ロックは自由戦線への参加拒否の理由にふたたびふれ、「われわれが自由戦線にはいることは、民衆層にたいする党员募集の門戸を閉ざしてしまうことを意味していたのです。そして、われわれはファシス

¹²⁷⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.575-576.

¹²⁸⁾ 共和派連盟の下院議員数をマシュフェールとノベクールは57人としているが、1936年の総選挙の結果にかんするジョルジュ・デュブーの分析では、59人である。Ph. Machefer, *L'Union des Droites, le P. S. F. et le Front de la Liberté, 1936-1937*, p.124; J. Nobécourt, *op. cit.*, p.576; Georges Dupeux, *Le Front populaire et les élections de 1936*, Armand Colin, Paris, 1959, p.132. 竹岡敬温「1936年フランス総選挙の分析」『大阪学院大学経済論集』第12巻第1号, 1998年, p.54.

¹²⁶⁾ *Gringoire*, 21 mai 1937.

トと分類されたことでありましょう。それは、われわれが絶対に望まないことでありました¹²⁹⁾」と語った。人民戦線政府の遭遇していた困難が不確実な未来の到来を予見させていた1937年春から夏にかけての数週間に、ド・ラ・ロックは、自由戦線への参加を拒否することによって、内戦への道を拒否し、同時に、ジャック・ドリオが体现しようとしていたフランス流「ファシズム」の方法とイデオロギーへの偏流を拒否したのであった。

結成後1年のうちに、フランス社会党 (PSF) は、大多数の都市や村に組織網を拡大した「大衆政党」となった。1937年6月5日の『ル・フランボー』紙の論説で、ド・ラ・ロックが語ったところによれば、党員総数は最少250万人を数え、そのうちの72.5パーセントが火の十字架団に属してはいなかったものであった。職業別構成については、全党員のうち商人16パーセント、事務労働者18パーセント、生産労働者18パーセント、農民23パーセント¹³⁰⁾、金利生活者・自由業・退職者等25パーセントであった。また、全体の30パーセントが右翼政党の元活動家、40パーセントが人民戦線の諸政党出身、30パーセントがどの党にも属していなかった¹³¹⁾。そう言明されたことはなかったが、党員の職業別、出身別構成からみれば、それは中道に位置する政党であり、自由戦線結成の呼びかけにたいして、国を2つの陣営に割ろうとするいかなる策略にも手を貸さないと決意しなければならない政党であった。

¹²⁹⁾ *Le Télégramme*, 21 juin 1937.

¹³⁰⁾ この数字はフランス社会党 (PSF) の党勢の都市から農村への移動を示すものであり、この時期、農村地域に多数の新しい支部が生まれた。J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.640-641.

¹³¹⁾ *Le Flambeau*, 5 juin 1937. フランス社会党 (PSF) 自身によって公表されたこれらの情報をフィリップ・マシュフェールは「十分信頼に値する」とみなしている。Philippe Machefer, *Le Parti social français et la petite entreprise*, *Bulletin du Centre d'histoire de la France contemporaine*, Université de Paris X-Nanterre, no.8, 1987, p.36; J. Nobécourt, *ibid.*, pp.577, 640, 1055, 1061.

人民戦線諸党は、フランス社会党 (PSF) が全体として極右を体现する組織のなかにのめり込むのを願っていた。その証拠に、「われわれはただひとつの事を待望しています…それは、伯爵カジミール・ド・ラ・ロック中佐が裏切者ドリオと手を握り、フランス社会党 (PSF) が共和主義の政党ではないことを証明することで¹³²⁾」と語ったルーヴィエ (ウール県) 出身の若き代議士ピエール・マンデス・フランスの言葉をあげることができよう。ド・ラ・ロックはドリオと手を結ぶことを拒否し、反共産主義の戦いが内戦のリスクを受け入れることを意味するとおもっていた下部党員たちの願いに答えて、議会主義への道を選んだのであった。

自由戦線へのフランス社会党 (PSF) の参加拒否は、とりわけ、1930年代の経済、社会危機に脅やかされ、その本当の原因が分からぬまま、運命から逃れようと道を探っていたプティ・ブルジョワたちの世界で党員を募集しようとする、ド・ラ・ロックの政治的決意をあきらかにするものでもあった。かれらプティ・ブルジョワたちは、危機の責任者が誰なのか教えてくれるものについていこうとしていたが、かれらが心底から暴力に反対し、過激主義、マルクス主義、ファシズムを恐れていることをド・ラ・ロックは理解していたのであろう。

合法的な枠のなかで広範な国民連合の役割をフランス社会党 (PSF) にになわそうとの野心を抱いていたド・ラ・ロックは、議会右翼——その「硬化症」をかれは告発していた——からもファッショ的極右からも一線を画そうとしていた。議会右翼の一部は、フランス社会党 (PSF) が手ごわい競争相手になるのを恐れていた。かつて断罪していた選挙に参加しようとして、国会の解散をつよく要求し、議席獲得に野心を燃やしてすでに選挙活動にはいつていたフランス社会党 (PSF) は、国会に長く席を占

¹³²⁾ Cit. par J. Nobécourt, *ibid.*, p.577.

めてそこに安住していたかれらの不安をかき立てたのである。

7. フランス社会党 (PSF) と議会制民主主義

火の十字架団解散後、合法政党として結成されたフランス社会党 (PSF) は、それまで以上に、中小企業家や農民の支持獲得に力を注いだ。「ブルジョワたちの社会では、小経営者、自由業、小地主が同党にたいして強い満足感を示している¹³³⁾」と、1936年12月23日付の警察の一通達が知らせている。また、ド・ラ・ロックは、1937年3月、フランス社会党 (PSF) の結成コミニケ発表直後に『ル・フランボー』紙上でのべた「火の十字架団の最初の信奉者、最初の宣伝家は大多数、中産階級のなかから募られた…われわれは本質的に中産階級の擁護者である¹³⁴⁾」という主張をあらためて繰り返した。

プティ・ブルジョワたちが左翼諸政党の政治綱領やマルクス主義のなかに感じとった危険にたいして、フランス社会党 (PSF) は、中産階級の行動の統一を訴え、1937年6月、アンバサドゥール劇場での講演で、同党政治局長エドモン・バラシャンが「急進党は中産階級を擁護することを放棄しました。その使命を果たすのは、フランス社会党 (PSF) です」と叫んだように、急進党に代わって、中産階級の擁護者になろうとした。極右同盟解散後、力と力の対決を避け、合法的な枠のなかで、広範な国民連合の役割をになうという野心を抱いた¹³⁵⁾フランス社会党 (PSF) は、人民戦線のなかの穏健分

子、すなわち急進党支持の有権者を獲得しようとしたのであった。

フランス社会党 (PSF) のこのような姿勢は、同党が手ごわい競争相手になるかもしれないと考えた議会右翼の不安を掻き立てた。また、ド・ラ・ロックが議会制度に帰順したことは、フランス社会党 (PSF) が極右からその潜在的支持者の多くを奪うという結果をともなった。

国会の議席獲得をめざす合法政党になったフランス社会党 (PSF) は、共和制に同意し、選挙の原理を尊重することをあきらかにして、共産党との絶縁を前提条件として、「善意の」すべての党に手をさしのべたが、しかし、8人の下院議員しかもたないフランス社会党 (PSF) には、議会では端役しかあたえられなかった。そのため、早くも1937年末に、ド・ラ・ロックは、「普通選挙の意志は尊重されなければならない。1936年5月の普通選挙は、人民戦線の実験に賛意を表明した。この実験が成功であったならば、それを続けなければならないが、いまや誰の目にもあきらかなように、それが失敗であった以上、約束を国民に返し、できるだけ早く、あらためて選挙民の意見を問わなければならない¹³⁶⁾」とのべて、主権を有する国民の審判を受けるよう主張した。

同じ頃、ルイ・マランが、共和派連盟の議員団にたいして、「ド・ラ・ロックは、かれの党にかけられた解散の脅しに不安を感じて、左翼のグループ、民主同盟、急進党に接近し、さらには、政府のいくにんかのメンバーたちとも交渉しようとしています。かれらの気に入るため

¹³³⁾ 警視庁文書, cit. par Philippe Machefer, *Le Parti social français*, in René Rémond et Janine Bourdin éd., *La France et les Français en 1938-1939*, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, 1977, p.307.

¹³⁴⁾ *Le Flambeau*, 4 juillet 1936.

¹³⁵⁾ ダラディエが、1945年1月13日、当時、チロルのイッターにあったドイツの収容所に捕われの身であったド・ラ・ロックと対談を交わしたことをメモに書き残している。そのなかで、ダラディエは、「結局のところ、わたしは、ド・ラ・ロックが合法的投票での過半数獲得を目的とした国民運動を起こそう

としていたと信じている」と書き、つぎに、「同様の過程によって、労資協調主義 (コーポラティズム) 的専制国家をつくりあげる」とつけ足している。Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives Edouard Daladier*, I DA1, dossier 5, notes manuscrites d'Edouard Daladier, sur l'affaire Stavisky, le 6 février 1934; Ph. Machefer, *Le Parti social français*, pp.307-308.

¹³⁶⁾ 警視庁文書, cit. par Ph. Machefer, *Le Parti social français*, p.309.

に、ド・ラ・ロックは、フランス社会党（PSF）を、かれが右翼の人間、古びた政党などとよんでいるすべての人びとに反対する勢力に仕立てあげようとしているのです¹³⁷⁾と語っている。

こうして、フランス社会党（PSF）は、ジャック・ドリオの率いるフランス人民党からの「自由戦線」結成の呼びかけを拒否したあと、極右との関係を絶ただけでなく、右翼の一部とも切り離された状況のなかで、反マルクス主義議会連合のなかに身を置こうとしたのであった。しかし、その連合のなかで同党が確かな位置を占めるためには、あらたな選挙を待たねばならなかった。

このような状況のなかで、フランス社会党（PSF）は中道政党との連携にその進路をみいだしたのであり、急進党との関係が同党にとって重要な問題となった。急進党内の人民戦線反対派の動きはフランス社会党（PSF）内部にも多くの共感を呼び、1937年12月、リヨンで開催された同党の党大会は、エドゥアール・ダラディエと、レオン・ブルム内閣の外相をつとめ、スペイン共和国政府への支援に反対した急進党員イヴォン・デルボスとに短いが熱烈な喝采を送った。

レオン・ブルム内閣時代、フランス社会党（PSF）議員団は終始、野党の立場をつらぬき、政府提出法案のうち、かれらが承認したのは有給休暇制度、公共事業計画、軍需産業の国有化、義務教育期間の延長、地方自治体への財政補助、スペイン派遣義勇兵の徴募禁止にかんする法案だけであり、週40時間労働法、小売局設置法、労働争議関係法には反対した。

1937年6月、レオン・ブルム内閣が急進党上院議員グループによって倒され、その後継内閣が急進党の主要リーダーのひとりカミーユ・ショータンによって組閣され（第三次ショー

タン内閣）、さらに1938年1月、社会党の入閣しない第四次ショータン内閣の成立した¹³⁸⁾ときが、フランス社会党（PSF）にとって、方向転換を示す最初の機会となった。第四次ショータン内閣にたいする信任投票では、「多くの弱点のため支持はできないが、社会党（SFIO）を締め出し、ソヴィエト派の行動を一時妨げたことは、白票で祝われるべきであった¹³⁹⁾」として、フランス社会党（PSF）は反対票を投じず、棄権した。

急進党への接近というド・ラ・ロックの戦略は教義的信条にもとづくものであったが、戦術的には、フランス社会党（PSF）から「ファシズムという過去のスキャンダル」を追放し、同党を急進党よりも共和派にみせようとするド・ラ・ロックの並々ならぬ配慮があった。「みずからを極右に分類して」アクション・フランセーズと同列に扱われることを断固拒否¹⁴⁰⁾し、1938年3月と6月にはドリオから、同年11月には共和派連盟からあった「自由戦線」結成への再度の誘いをいずれも拒否したのは、そのためであった。

1938年3月、第四次ショータン内閣が総辞職し、ふたたび組閣を依頼されたレオン・ブルムは、国際的危機に対処するために挙国一致内閣の組閣を呼びかけ、まず共産党に入閣を要請して、その原則的受諾の保証をえたあと、右翼を含む各政党の代表を自宅に招いて、かれの呼びかけに同意できるか否かを尋ねた。フランス社会党（PSF）からは、イバルネギャレーに代わってフェルナン・ロップが右翼代表のひとり

¹³⁸⁾ 竹岡敬温「フランス人民戦線の最期」『大阪大学経済学』第37巻第2号、1987年9月、pp.16-35；竹岡敬温「人民戦線の解体-1930年代フランスの政治と経済-(1)」『大阪学院大学経済論集』第12巻第3号、1998年12月、pp.17-50参照のこと。

¹³⁹⁾ *Le Petit Journal*, 22 février 1938. 1938年初め、フランス社会党（PSF）は、フランスの5大全国紙のひとつに数えられる日刊紙『ル・プチ・ジュール』の買収に成功した。

¹⁴⁰⁾ *Bulletin d'information du PSF*, no.71, 23 mars 1938.

¹³⁷⁾ Cit. par Ph. Machefer, *Le Parti social français*, p.309.

として出席した¹⁴¹⁾。

一方、ド・ラ・ロックは、「国家の安全のために挙国一致の行動」を要請した1938年3月11日付の大統領宛て公開書簡のなかで、「わが共和国は、その内閣から、外国勢力の支配下にある人物たち、内乱の扇動者たちだけは、なんとしても排除しなければなりません¹⁴²⁾」と訴えた。外国勢力に従属する内乱の扇動者とは、もちろん共産党のことであった。

レオン・ブルムの挙国一致内閣の構想が野党議員たちの反対に遭って失敗し、1936年と同じく社会党主導の人民戦線内閣が組閣された¹⁴³⁾とき、ド・ラ・ロックは、1938年3月19日のワグラム会館での演説のなかで、「内閣のなかで、外国政府、モスクワの政府への従属を受け入れ、それを承認し、ひけらかしている共産党の指導者たちとの協力を認めるわけにはいきませんでした」と語り、3月末、パリ地区で労働争議が広がるなか、総選挙の即時実施を要求した¹⁴⁴⁾。

1938年4月8日、第二次レオン・ブルム内閣はその財政・経済再建法案が上院に拒否されて総辞職に追い込まれ、次期内閣の首班には急進

党のエドゥアール・ダラディエが指命された。その翌日の4月9日に招集されたフランス社会党 (PSF) 常任運営委員会は、救国内閣の組閣を要求し、「ダラディエ氏が、前内閣の無分別な行政と深刻な国際情勢とによってもたらされた緊急事態のなかで組閣の任にあたっているとき、公共の利益と国民の名誉への強い関心と、労働と生産を国の大きな力に結びつけて、フランスに救国内閣を打ち立てる手段を探求しようという配慮とのみによって動かされ、不偏不党の態度を保持しようとしているフランス社会党 (PSF) は、過去および最近の政治的経歴に照らして、あきらかに、個人的野心だけを表わす人物、内閣のなかで破壊活動をもくろむおそれのある人物、軽率に軍事的介入や軍事的衝突の可能性を考えかねない人物、さらに、どこの国であれ、外国列強からの影響を受けた人物を、政府に入れるのがきわめて危険であるという事実、国民の注意を向けたい¹⁴⁵⁾」との声明を発表した。

フランス社会党 (PSF) は、「レオン・ブルム内閣総辞職後、そして、他国への非介入政策を厳しくとりつづけながらも、わが国とイタリアとの関係強化の意図をはっきりと表明したボネ氏の外相就任の結果、政府の政策全般に生じた変化を評価¹⁴⁶⁾」して、最初、ダラディエ内閣にたいする信任投票では棄権することに決めていた。しかし、イバルネギャレーとジョルジュ・ボネとの会談の結果、フランス社会党 (PSF) の議員はダラディエ内閣に信任票を投じた。イバルネギャレーは、その理由を、「共産党との約束がまったくなく、わが国の対外政策を好ましい方向に立て直すべく立案され、フランスの存在を、わが国の利害と威信がそれを必要としているすべての場所で、あきらかにすべきだと決意されたことは、わたしには新し

¹⁴¹⁾ レオン・ブルムが各政党の代表を自宅に招いた数時間前、国際情勢の重大化のため、社会党 (SFIO) 主導下の「国民連合」内閣をつくらねばならないことを説得しようとして集めた社会党 (SFIO) 全国評議会の終わりに、かれは「ひとつの例外を除いて、すなわち、共和制の諸制度を倒そうと共謀し、外国の手先になることによって、自分の意志で、国民共同体からみずからを排除している人物たちを除いて、万人に呼びかける時がきた」と発言した。レオン・ブルムが呼びかけたのは「共和主義者」にたいしてであり、かれは、「外国人」と共謀して共和制を打倒しようともくろむ、「ファシスト」の語で一括されるすべての組織を排除しようとしていたのであり、そうだとすれば、フランス社会党 (PSF) をかれが構想する挙国一致内閣の一員として招いたことは、レオン・ブルムが同党を「ファシスト」とは考えていなかったことになろう、とノベクールは書いている。J. Nobécourt, *op. cit.*, p.650.

¹⁴²⁾ Archives Nationales, 451 fonds privés, correspondance no.302bis. *Le Petit Journal*, 12 mars 1938.

¹⁴³⁾ 竹岡「フランス人民戦線の最期」参照のこと。

¹⁴⁴⁾ *Le Petit Journal*, 29 mars 1938.

¹⁴⁵⁾ *Le Petit Journal*, 11 avril 1938.

¹⁴⁶⁾ *Le Petit Journal*, 13 avril 1938.

い政策方針だとおもわれ…わたしの友人たちとわたしは全権委任に賛成することに決意し、われわれ8人の投票によって政府を支持したのである…ダラディエ内閣は妥協の内閣である。その権限は限られている…しかし、それは立ち直りへの賢明な前提となるかもしれない¹⁴⁷⁾」と語った。ダラディエ内閣は、1938年4月12日、共産党と社会党の支持だけでなく、ルイ・マランの共和派連盟、フランダンの民主同盟、フランス社会党 (PSF) など、右翼の支持も受けて信任された。

このダラディエ内閣信任は、フランス社会党 (PSF) の歴史にとって、重要な瞬間であった。1934年2月6日、反ダラディエ内閣のデモをおこなった人びとが、いまや、それを支持したのである。火の十字架団が街頭運動によってその意志を表明したのにたいして、フランス社会党 (PSF) は議会ロビーの会話によって行動したのである¹⁴⁸⁾。ド・ラ・ロックは、この変化を釈明して、「死に瀕している“人民戦線”に死をもたらさねばならないと同時に、その生みの親であったもう一方の死者を支えるよう努力しなければならない¹⁴⁹⁾」とのべている。

こうしてフランス社会党 (PSF) は政府与党の一員となったが、しかし、その弱小な議会勢力のため、強い姿勢で政府や急進党と交渉することはできず、それができるには、国内におけるフランス社会党 (PSF) の勢力の大きさに比例した数の議員を同党にあたえるであろう、新しい国会議員選挙を待たねばならなかった。

ダラディエ内閣は、公共事業計画、商工業への信用拡大措置、本国と植民地との関係を強化する「帝国主義的」政策を定めた一連の政令を公布し、社会政策では、残業の実施を容易にして、週40時間労働法の適用を緩和した。ド・ラ・ロックは、これらの政策を「無数の傷口に

巻かれた多数の包帯¹⁵⁰⁾」と表現した。

1938年8月21日のラジオ演説で、ダラディエ首相が、平和への意志を明確にするとともに、この意志を軍備強化の努力に向けることを明言し、通貨危機を避け、予算を均衡させるという意図をあきらかにし、「ヨーロッパの一般情勢と国家的緊急事のために」週40時間労働法の修正が必要であると訴えたとき、フランス社会党 (PSF) は、『ル・プティ・ジュルナル』(1938年初めに同党が買収したフランス最大の日刊紙のひとつ)紙上で、同党の考えが首相の所見と合致したことを喜び、とくに、「フランスをふたたび労働につかせなければなりません」というダラディエが使用した表現を賞讃した。ド・ラ・ロックは、「首相が話したことはすべて、1935年9月末に公表されたフランス社会党 (PSF) の政策綱領のなかに含まれている¹⁵¹⁾」とのべた。ダラディエのラジオ演説直後、週40時間労働法にかんする首相の発言に抗議して、社会主義共和派連合に属する2人の閣僚フロサールとラマディエが辞任したとき、ド・ラ・ロックはかれらを「民衆の意識の変化を無視した、時代錯誤の保守主義者¹⁵²⁾」とよんだ。

これにたいして、ダラディエは、急進党執行部にかれのラジオ演説の意義を説明するなかで、フランス社会党 (PSF) から寄せられた賛辞にたいして苦情を呈した。ド・ラ・ロックは、「われわれはダラディエに祝意を表したのではない。われわれ自身を祝ったのである。なぜなら、1930年以来、まず火の十字架団、ついで、その思想を受け継いだフランス社会党 (PSF) は、つねに人間の進歩を求めてきたからである…われわれ以前に、フランス国民に和解と社会進歩——この2つは緊密に結びついて——を説いてきたものがあるか¹⁵³⁾」と、

¹⁴⁷⁾ *Le Petit Journal*, 14 avril 1938.

¹⁴⁸⁾ Ph. Machefer, *Le Parti social français*, p.312.

¹⁴⁹⁾ *Le Petit Journal*, 16 avril 1938.

¹⁵⁰⁾ *Le Petit Journal*, 30 mai 1938.

¹⁵¹⁾ *Le Petit Journal*, 23 août 1938.

¹⁵²⁾ *Le Petit Journal*, 25 août 1938.

¹⁵³⁾ *Le Petit Journal*, 30 août 1938.

これに応酬した。

1938年11月、数週間の激しい労働争議のあと、週40時間労働法に再度重要な修正をもたらす政令が閣議で採択された¹⁵⁴⁾ときも、フランス社会党 (PSF) は、政府の「毅然とした」態度を賞讃し、人民戦線との明白な断絶を確認するために、政府に信任票を投じた。

1938年9月、ドイツがチェコスロヴァキアのズデーテン地方割譲を要求して、国際情勢が一気に緊迫化したとき、ド・ラ・ロックは、9月17日、「ダラディエ内閣が下院でその信を問うたとき、わが党の議員が信任票を投じて内閣を支持したのは、ダラディエが2つの有害分子、ブルムと共産党のヘゲモニーを取り除いてくれたからである。同様にして、今日、われわれはダラディエ内閣の外交政策を支持する。それが一部の悪賢い策略家たちの好戦論と同時に少数の成り上がり者たちの敗北主義にも反対しているとおもわれるからである¹⁵⁵⁾」と語り、ミュンヘン会談直前の9月29日には、ダラディエの「明晰な愛国心」にたいする信頼を表明した。チェンバレン、ダラディエ、ムツソリーニ、ヒトラーの四国首脳協議の結果、ドイツへのズデーテン地方割譲を認めたミュンヘン会談を終えてダラディエが帰国したさい、ラフィット街の『ル・プティ・ジュール』紙発行所の建物は満艦飾の旗で飾られた。10月2日、ド・ラ・ロックはヒトラーの「後退」の原因をダラディエの「精力的な態度」に帰し、フランス社会党 (PSF) の議員たちはミュンヘン協定を承認した。

ミュンヘン会談をめぐるド・ラ・ロックのこのような言動のために、かれは、世論によって、ミュンヘン派で平和主義者として分類されたが、しかし、かれは、いかなる代価を払って

も平和を擁護しようとする絶対的な平和主義者ではなかった。10月19日、パリのスポーツ・センターで開かれたフランス社会党 (PSF) の夏休み明けの集会において、ド・ラ・ロックは、ミュンヘン協定承認の理由を説明して、「戦争は一時延期されました。ダラディエ氏も、そのことを知っています。かれはまた、わが国の師団の装備のために、わが国の空軍の危機的状況のために、わが国の生産が不十分なために、わが国の産業動員が細分化され遅れているために、差し迫った緊急の努力が必要であることを知っているのです¹⁵⁶⁾」とのべ、ミュンヘン協定によって一時的な猶予がえられたのだという主張を展開した。その後、『ル・プティ・ジュール』紙も、同じ主張を繰り返した。

また、右翼や中道派の平和主義が、反共産主義は反ナチズムに勝り、ヒトラーは反スターリンの砦であるという共通の確信にもとづいてたのみにたいして、ド・ラ・ロックはこのような主張をおこなったことはなかった。

ミュンヘン会談後、ダラディエ内閣への全権委任に賛成票を投じたことは、フランス社会党 (PSF) の方向転換を追認するものであった。「われわれは政府への全権委任に賛成投票した。そうすることが、現時点でのわれわれの責務だとおもわれたからである¹⁵⁷⁾」と同党議員のウージェーヌ・ペベリエがのべている。しかし、この投票で、フランス社会党 (PSF) はほんの補助的な役割しか演じることができなかった。同党が議会のなかで重要な存在になることが必要であった。

そのため、フランス社会党 (PSF) の関心は、国会の解散問題に向けられた。1938年10月21日の『ル・プティ・ジュール』紙で、エドモン・バラシャン (フランス社会党政治局長) は、「議会制度の断固とした支持者であるわれわれは、国会解散の可能性にたいする大多数の

¹⁵⁴⁾ 竹岡敬温「週40時間労働法の修正とフランス経済」『大阪大学経済学』第41巻第2・3号、1991年12月、pp. 239-258参照のこと。

¹⁵⁵⁾ *Le Petit Journal*, 18 septembre 1938.

¹⁵⁶⁾ Cit. par Ph. Machefer, *Le Parti social français*, p.315.

¹⁵⁷⁾ *Le Petit Journal*, 14 octobre 1938.

議員たちの現在の態度にわれわれが吐き気を覚えていると、これまで以上に遠慮なくいうことができる」と書いた。そして、共産党は、平和なフランスが「戦争の党」に重大な損害をもたらすことをよく知っているため、国会解散を望まず、社会党(SFIO)も、その政策が完全に失敗したあとでは、選挙をおこなえば全面的な敗北は避けられないため、国会解散を望まず、穏健派は、経済再建のための不人気な措置に賛成することによって、結果的に共産党と社会党に利する行為をし、もっと重大なことには、急進党に不明確な政策をとりつづけることを許し、その態度はまったく理解しがたいとかれはのべ、結論として、国会解散と比例代表制選挙制度の採用を要求した¹⁵⁸⁾。『ル・プチ・ジュルナル』紙は、10月23日号の一面の告示欄でこの問題をふたたびとりあげ、「国民は意見を变えたのではないか。それなら、議員も変えよう。1936年の国会でもって1940年の国会の政策をおこなうのは、反民主主義的である¹⁵⁹⁾」と主張した。

しかし、1938年10月末にマルセイユで開かれた急進党大会は国会解散問題を巧みに避けたため、フランス社会党(PSF)と急進党との関係は緊張した。マンシュ県キャラントンの支部集会で、ド・ラ・ロックは、「現行の体制のもと、人民戦線内閣として組閣された現内閣は、長期の困難な計画を立てるのに不可欠なまともに欠けています」とのべ、ダラディエ内閣の閣僚たちのあいだでフランス再建に必要な結末がみられないため、同内閣が公布しようとしている大量の政令を——たとえ、それらがこれまでよりすぐれたものであったとしても——拒否しなければならないと言明した¹⁶⁰⁾。ダラディエはさんざん罵倒され、「ミュンヘンから帰国したときには熱烈に歓迎され、マルセイユでは

3,000人の崇拜者に迎えられたダラディエであったが、いまや、固定観念にとらわれた哀れな男になりさがってしまった¹⁶¹⁾」と『ル・プチ・ジュルナル』紙はこきおろした。

フランス社会党(PSF)のこのような強硬な態度を可能にしたのは、同党宣伝部長シャルル・ヴァランが立候補して勝利を収めた、1938年10-11月のパリ9区の補欠選挙の結果であった。それは、1936年以来、首都でおこなわれた最初の国会議員選挙であった。ヴァランの対立候補としては共産党と社会党からそれぞれひとり、穏健派からは「議席を人民戦線に渡すまいとしてであろう¹⁶²⁾」、6人の候補者が立ったが、主要な対立候補は、アクション・フランスとフランス人民党の支持を受けた共和派連盟の候補者(ニーセル将軍)であった。

第一回投票で、ヴァランは28パーセントの得票率で一位になった。第一回投票と第二回投票とのあいだに、ダラディエはエドモン・バラシャンに電話して、「ヴァランを当選させてはなりません。それはファシズムの勝利になるでしょう」と警告した¹⁶³⁾。ダラディエの目には、1938年においても、フランス社会党(PSF)の想起させるイメージは、なお、1934年の火の十字架架団のイメージだったのである。第二回投票では、ニーセルが「ナショナリストの勝利」を願って、結局、立候補を辞退し、ヴァランは投票数の54パーセントを獲得して当選した。アンリ・ド・ケリリス(ヌイー選出下院議員)は、かれの主宰する『エポック』紙に、「パリ9区選挙は、わたしが、フランス社会党(PSF)をその結成以来、もっとも活動的で、現在の政治状況にもっともよく適応した国民政党とよんだことが誤りではなかったこと

¹⁵⁸⁾ *Le Petit Journal*, 21 octobre 1938.

¹⁵⁹⁾ *Le Petit Journal*, 23 octobre 1938.

¹⁶⁰⁾ *Le Petit Journal*, 24 novembre 1938.

¹⁶¹⁾ *Le Petit Journal*, 20 novembre 1938.

¹⁶²⁾ Edmond Barrachin, *Le Petit Journal*, 28 octobre 1938.

¹⁶³⁾ 1972年4月24日、フィリップ・マシュフェールがエドモン・バラシャンからえた証言, cit. par Ph. Machefer, *Le Parti social français*, p.317.

¹⁶⁴⁾ *Le Petit Journal*, 8 novembre 1938.

を証明した¹⁶⁴⁾」と書いた。

1938年12月4日のパリ市会議員選挙で、フランス社会党 (PSF) のレオポール・マルシャンが急進党の候補者に勝って当選したことも、フランス社会党 (PSF) の躍進を裏づけるものであった。

1938-1939年の2年間、ド・ラ・ロックは、ヴァラン、イバルネギャレー、バラシヤン、クレセールらと交代しながら、フランス社会党 (PSF) の勢力網を国じゅうに拡大するために、全国を行脚した。1938年12月11日から1939年8月15日までに、ド・ラ・ロックは支部の責任者たちと467回会議をおこない、2,000回近くの集会をこなした¹⁶⁵⁾。

火の十字架団時代のようなスタイルのデモは完全に姿を消し、パリ地域のフランス社会党 (PSF) の10万人の党員が参加した1938年5月8日のジャンヌ・ダルク祭の行進は別として、閉鎖された場所での古典的な集会がこれに代わった。戦前最後の1939年5月14日のジャンヌ・ダルク祭には、20万人の党員がリヴォリ通りを行進した。

1938年12月から数か月間、支部数の増加に応じた支部組織の整備¹⁶⁶⁾と1940年に予定されていた選挙の準備という2つの目的をもって、大がかりなキャンペーンがすべての県を対象におこなわれた¹⁶⁷⁾。1940年の選挙では、フランス社会党 (PSF) は全選挙区に候補者を立てるつもりであった。1939年3月、ド・ラ・ロックは、このキャンペーンの結果、「いかに小さなコミューンでも、わが党の代表やグループのいな

¹⁶⁵⁾ *Le Petit Journal*, 14 août 1939.

¹⁶⁶⁾ *Archives Nationales*, fonds privés 451, dossier 117, no.18, Charles Vallin, rapport au 3^e congrès du PSF, 3 décembre 1938; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.642, 1061.

¹⁶⁷⁾ Fondation Nationale des Sciences Politiques, Communiqué du Comité exécutif du 14 janvier dans *Bulletin d'information du PSF*, no.93, du 30 janvier 1934; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.642, 1061.

だ¹⁶⁸⁾」と語った。

したがって、国会で、ダラディエとポール・レノーが、下院議員の任期延長の可能性をほめめかす演説をおこなったとき、フランス社会党 (PSF) は激しく反発した¹⁶⁹⁾。同党常任運営委員会は、「現在の立法議会任期を2年間延長するという欺瞞的行為と、国を救うための社会的愛国心の奮起の表明を遅らせ押さえ込もうとする正真正銘の犯罪行為にたいして、全国民に警戒¹⁷⁰⁾」をうながした。バラシヤンは、「スキヤンダルがたくらまれている…議会主義は存亡の危機に瀕している。人民戦線の失敗は全面的である。その結果がミュンヘン会談と一連の政令である。ミュンヘン会談直後に、ダラディエは国会を解散すべきであったろう¹⁷¹⁾」とのべた。

このように1938年末にはフランス社会党 (PSF) とダラディエ内閣との対立が強まったようにおもわれる一方で、フランス社会党 (PSF) は、週40時間労働法の緩和に抗議して労働総同盟 (CGT) が呼びかけた11月30日のゼネストの拒否を訴えた。12月8日と9日におこなわれた政策全般にかんする国会審議にさいしては、同党の議員たちは政府を支持した。フェルナン・ロップは、戦争を遠ざけ、政治ストに毅然と対応した政府の態度を賞讃するために政府を支持するのであると説明し、イバルネギャレーは、社会党と共産党がダラディエ内閣の政策を攻撃するのは、「その政策がよいからだ」といい、「この9月には、共産党は、あらゆる手段を使い、わが国を戦争に引きずりこんで農民を虐殺しようとし、革命を引き起こし、政権を奪取しようとした」とのべて、「共産党の陰謀」を激しく非難した¹⁷²⁾。12月11日から18日にかけて、フランス社会党 (PSF) は、パリを除くフランスの北半分の地域で、反マルクス主義

¹⁶⁸⁾ *Le Petit Journal*, 9 mars 1939.

¹⁶⁹⁾ *Le Petit Journal*, 12 novembre 1938.

¹⁷⁰⁾ *Le Petit Journal*, 15 novembre 1938.

¹⁷¹⁾ *Le Petit Journal*, 16 novembre 1938.

¹⁷²⁾ *Le Petit Journal*, 12 décembre 1938.

の大キャンペーンを起こし、集会を何度も開いて、共産党指導者たちを逮捕し、即刻、容赦なく罰するよう要求した。

12月22日には、11月に公布された一連の政令の改定にたいする投票で、ダラディエ内閣はわずかに7票差の過半数で信任をえたが、フランス社会党 (PSF) 議員団の棄権が政府を救ったのであった。

しかし、1939年1月には、『ル・プティ・ジュルナル』紙の論調は硬化した。1月9日には、ド・ラ・ロックは、ダラディエ内閣には一貫性がなく、同内閣を救国内閣と考えることはもはやできないとし、「首相は、臨時の代行者としてしか、支持できない¹⁷³⁾」とのべ、3月9日の『ル・プティ・ジュルナル』紙の論説では、「われわれがダラディエ氏を支持し、慎重な態度をとり、投票では反対にまわらず棄権をした」からといって、「かれになにがしかの人気があるとおもうのはまちがいである…もっと悪い事態を恐れるあまり、やむをえず¹⁷⁴⁾」かれを支持したのであると書き、ダラディエにたいするフランス社会党 (PSF) の支持には限度があることをあきらかにした。

フランス社会党 (PSF) 執行委員会は、1939年1月、「人民戦線」という「マルクス主義者の陰謀」から生まれ、「愛国的政府に安定した健全な与党を提供することのできない」国会の構成にたいして国民に警戒を呼びかけ、すでに1937年のリヨンの大会で決定された選挙政策にもとづいて、同党は「きわめて少数の例外を除いて」全選挙区に候補者を立てるつもりであると発表した¹⁷⁵⁾。いまや、国会内の「カードを配り直す」ことが、フランス社会党 (PSF) の最大の関心事であった。

これにたいして、フロサル (社会主義共和派連合) は、「中道派と右翼の議員は、かれら

の犠牲において、かれらが占める200議席のなかの獅子の分け前を手に入れることをド・ラ・ロック氏に許そうなどは、すこしも望んでいない¹⁷⁶⁾」と反論した。たしかに、中道派と右翼の「昔から存在する諸政党の神聖連合」のなかにフランス社会党 (PSF) が「突破口をあける¹⁷⁷⁾」ことは容易ではなかった。ド・ラ・ロックは、「場合によっては、第三者との妥協の方策を探らなければならない。このような場合を子細に検討することが必要である。それは、ただ、マルクス主義者の勝利の脅威に挑戦するためである。フランス社会党 (PSF) は、誠実に、しかし断固として、そして全面的に、同党が占めるべき地位があたえられることを望んでいるが、しかし、明白な一般的利益の前では、若干の特別な例外を受け入れるつもりである¹⁷⁸⁾」とのべ、なにがしかの譲歩が必要ならば、それを甘受するという意向を示した。

1939年3月18日には、ド・ラ・ロックは、「もしダラディエ氏が、かれの気力が口先だけの一時的なものではないことを国民に納得させたいのなら、内閣を改造すべきである¹⁷⁹⁾」とのべ、内閣の改造を要求した。

フランス社会党 (PSF) が当時どの程度の政治勢力となっていたかは、この時期におこなわれた地方選挙や国会議員の補欠選挙の結果が参考になろう。

コート・ドール県オクソンヌの県会議員選挙 (1939年3月) の第一回投票では、フランス社会党 (PSF) の候補者は、急進党の候補者には大きく水をあげられたが、社会党 (SFIO) の候補者とは踵を接していた。社会党 (SFIO) とフランス社会党 (PSF) とは、第二回投票では、前者は人民戦線精神の名において、後者は人民戦線解体を目的として、急進党に配慮して

¹⁷³⁾ *Le Petit Journal*, 12 janvier 1939.

¹⁷⁴⁾ *Le Petit Journal*, 9 mars 1939.

¹⁷⁵⁾ *Le Petit Journal*, 15 janvier 1939.

¹⁷⁶⁾ *Le Petit Journal*, 17 janvier 1939.

¹⁷⁷⁾ *Le Petit Journal*, 25 février 1939.

¹⁷⁸⁾ *Le Petit Journal*, 23 février 1939.

¹⁷⁹⁾ *Le Petit Journal*, 18 mars 1939.

立候補を取り下げた¹⁸⁰⁾。

ニースでの、上院議員に選出されて空席となった下院議員の席を争う国会議員選挙(1939年3月)では、フランス社会党(PSF)は独自の候補者を立てなかったが、同党が支持したジャック・ブーナンが第二回投票で当選した。1939年7月3日と11日の『ル・プティ・ジュルナル』紙は、ブーナンのフランス社会党(PSF)アルプ・マリタイム県支部への加盟と同党国会議員団への参加を発表した¹⁸¹⁾。

コート・デュ・ノール県サン・ブリューで急進党のミシェル下院議員が上院議員になった結果、実施された国会議員選挙(1939年3月)では、第一回投票で、急進党候補者(フランソワ・オーフレ)が一位になり、フランス社会党(PSF)の候補者(ユシェ・デュ・ゲルムール)がそれにつぎ、1936年の総選挙でミシェルと争って敗れた人民民主党のル・グエンがそのあとに続いた。急進党コート・デュ・ノール県支部は、「急進党候補者オーフレ氏の勝利を確実にするため、第二回投票では、すべての共和主義者とともに、元火の十字架団の党で、ヒトラー主義とムッソリーニ主義のフランスにおける手先であるフランス社会党(PSF)によって代表された破壊的ファシズムと戦う決意を宣

言する¹⁸²⁾』という、フランス社会党(PSF)を激しく攻撃した決議を公表した。フランス社会党(PSF)と人民民主党との交渉は失敗し、ル・グエンは立候補を辞退しなかった。その結果、第二回投票では、次点のユシュ・デュ・ゲルムールを大きく引き離して、オーフレが当選した。バラシャンは、サン・ブリューの選挙区が50年来、急進党の地盤であり、その状況は変わっていないことを認めざるをえなかった¹⁸³⁾。

しかし、ヴォージュ県ルミルモンの国会議員選挙(1939年5月)では、フランス社会党(PSF)が勝利し、県議員でプロンビエールの市長であった同党の候補者が当選した。急進党は候補者を立てなかった。

全体として、1936年5月の総選挙から戦争勃発までに実施された国会議員の補欠選挙で、フランス社会党(PSF)は3人の候補者を当選させ、かれらは同党議員団の8名に加わった。のちに、バラシャンは、もし1940年に選挙がおこなわれていたならば、フランス社会党(PSF)は約100人の議員を下院に送り込んでいたであろうとのべている¹⁸⁴⁾。その計算の根拠は単純であり、フランス社会党(PSF)支持の150万人の有権者数は、候補者ひとりあたりの得票数を1万5,000票とすれば、理論上は、約100人の議員を意味するというものである。また、1939年6月27日、3か月の審議のあと、国会議員選挙の比例代表制が下院で可決されたとき、この改革の反対者たちはフランス社会党(PSF)に大きな恐れをいだき、急進党¹⁸⁵⁾のオクターヴ・クリュテル(ルーアン選出代議士)や社会党のアンドレ・フィリップ(リヨン選出代議士)は、比例代表制の下ではフランス社会党(PSF)は

¹⁸⁰⁾ *Le Petit Journal*, 20 mars 1939.

¹⁸¹⁾ *Le Petit Journal*, 3 et 11 juillet 1939. ただし、ジャック・ブーナンは、その回顧録(Jacques Bounin, *Beaucoup d'imprudences*, Stock, Paris, 1974)のなかで、かれがフランス社会党(PSF)の支持を受けたことにかんたんに触れているが、その支持が選挙のさいに受けたものであったとはいって、反対に、かれが「どのグループにも参加を申し入れたことはなかった」ことを強調している。一方、フランス社会党(PSF)にかんする文書(*Archives Nationales, fonds privés 451, dossier 119, A 3b, Bounin*)のなかには、バラシャンに宛ててかれが「“われわれの”成功のために尽くしてくれた大きな役割」に感謝して打った1939年3月28日付のブーナンの電報と、「フランス社会党(PSF)の議員団にわたしの参加をお願いしたい」と書かれたブーナンのイバルネギャレー宛て1939年7月5日付の手紙が残されている。Cf. Ph. Machefer, *Le Parti social français*, p.323; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.646, 1062.

¹⁸²⁾ *Le Petit Journal*, 31 mars 1939.

¹⁸³⁾ *Le Petit Journal*, 3 avril 1939.

¹⁸⁴⁾ 1972年4月25日、フィリップ・マシュフェールがエドモン・バラシャンからえた証言。Cf. J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.646, 1062.

80人の代議士を当選させるだろうとの予想をのべた。

早期の選挙実施を望んで、フランス社会党 (PSF) は国会の任期延長にことごとく反対した。この問題にかんする政府への全権委任の可否が審議されたとき、1938年秋のパリ9区の補欠選挙で下院議員に当選したシャルル・ヴァランは、「立法議会の任期延長が、そのために利益を受ける人びとによって間接的に決定され承認されるならば、それは正真正銘のスキャンダルになるであろう¹⁸⁶⁾」と反対した。

イバルネギャレーは、議会の諸政党グループの責任者たちに手紙を書き、「現国会の任期が政令によって延長されるかもしれないという事態を前にして、きわめて多数の同僚議員は、暗黙裡にはあっても、普通選挙にたいするこのような侵害を許すことはできないと考えています。いうまでもありませんが、このような性質の措置が必要となるのは、国際情勢のみによってでありましょう。このような場合には、国会を10か月間だけ延長するという可能性を認めることはできません。しかし、いかなる場合でも、いまから2年間も、憲法が保証する権利を選挙民から奪うような措置を正当化することはできません。われわれは、すぐにも、国会のさまざまな政党グループの共通の抗議に加わりたいとおもっています。事態は急を要しますの

¹⁸⁵⁾ 急進党は、1938年2月19日、パリのミュチュアリテ会館での集会で、比例代表制に反対していた。また、フロサル (社会主義共和派連合) が、国会での政府にたいする質問のなかで、「人民連合に賛成票を投じようとしている現在の代議士のうちの多くは、競争相手が運に恵まれれば、その相手に議席を譲らなければならないでしょう。わたしは、とりわけ中道派と右翼のわが同僚議員たちの犠牲精神に感服いたします。かれらは現在、200人いますが、フランス社会党 (PSF) の候補者がかれらの保持している議員権能の半分を奪い取ることでしょう。こうして、下院では、一方で100人の共産党議員、他方で100人のフランス社会党 (PSF) 議員が存在することになるでしょう」とのべている。Cit. par *Le Petit Journal*, 22 juin 1939.

¹⁸⁶⁾ *Le Petit Journal*, 11 mars 1939.

で、あなた方のグループがそれに参加していただけかどうか、5月25日までにお知らせできると有難いのですが¹⁸⁷⁾」と協力を訴えた。シャルル・ヴァランは、国会任期の延長を「権力の恐るべき濫用だ」といい、「民主主義的自由をいままさに踏みつけようとしている人間が、民主主義的自由の強情で思い上がった擁護者のように振る舞うべきではない。独裁者とは、あえてその名を口にしない人間だ¹⁸⁸⁾」とつけ加えた。

1939年6月初め、フランス社会党 (PSF) 議員団は、議員の任期を政令によって延長しないよう政府に要請する決議案を提出した¹⁸⁹⁾。それにもかかわらず、国際的緊張を理由に国会の任期延長措置がとられたとき、同党議員団は、「ドラディエ氏とレノー氏は政権にしがみつきたいのである。それをうまくやるために、無条件に国会の任期を2年間延長したのである。いずれの内閣であろうと、議会制度をこのように荒らっぽく傷つけたならば、国民の意志の尊重とその権利の名において、国じゅうに騒動が起こる危険があるとは考えなかったのであろうか¹⁹⁰⁾」との声明を発表した。ド・ラ・ロックも、国会の任期延長を「独裁的背信行為」とよび、「その目的は、フランス社会党 (PSF) の成功を遅らせ、さらにはフランス社会党 (PSF) の全党員と委員長に求められている努力を、いまから1942年までに、疲弊させることであろう¹⁹¹⁾」と抗議した。

ドラディエには、1938年4月に、法律並みの効力をもつ政令の公布権——全権——があたえられ、それ以後、何度も更新され、第二次世界大戦勃発に先立つ1か年半のあいだ、国会はその立法権をほとんど政府に引き渡した。1939年

¹⁸⁷⁾ *Le Petit Journal*, 23 mai 1939.

¹⁸⁸⁾ *Le Petit Journal*, 13 mai 1939.

¹⁸⁹⁾ *Le Petit Journal*, 1^{er} juin 1939.

¹⁹⁰⁾ *Le Petit Journal*, 14 août 1939.

¹⁹¹⁾ De La Rocque, Avant la rentrée, *Le Petit Journal*, 15 août 1939.

5月17日の『ル・プティ・ジュール』紙で、エドモン・バラシャンがその状況をつぎのように書いて批判している。「フランスの国会の現在の危機に疑義を差し挟むものはいないであろう。議会機構が錆びつき、是が非でも修繕が必要なことは、だれもが知っている事実である。けれども、根本的な改革をおこなう能力があり、このような事態を改善することができるにもかかわらず、政府もどの党もそれを実行しようとするつもりはまったくない。後世に編まれる歴史には、現代は、わが国の民主主義体制がヴァカンスで議員が不在のときしか機能しない時代であったと語られることだろう。実際、国会にはもはや今日たったひとつの使用価値しかない、つまり、国会から取り上げられた全権を内閣に委任するという使用価値しかないようである。ド・ラ・ロック中佐とその党がファシズムに似た方法に断固抗議しているにもかかわらず、急進党の委員長で、共和制の諸制度の擁護者を自任しているダラディエ氏が紛れもない独裁的権力を行使しているのは、まったく奇妙なことではないだろうか。フランス社会党 (PSF) は政府への全権委任に反対である¹⁹²⁾。」

フランス社会党 (PSF) は急進党と中産階級の支持を争い、この点で、極右からやってきたド・ラ・ロックと人民戦線からやってきたダラディエはともに同じ役割を演じることを望んだのであったが、しかし、戦争の危機が高まるなか、権威確立の必要が緊急の課題となっていた1939年のフランスの政治・社会構造に対応して、共和主義的独裁を体現する役目を引き受けたのは、急進党委員長のダラディエであった¹⁹³⁾。

1936年7月から1940年6月までの4年間は、ド・ラ・ロックが「フランス社会党 (PSF) という事実」との表現によって定義したもの、す

なわち、フランス社会党 (PSF) の名の下につくられた大衆組織がフランス政界のなかに存在した期間であり、1939年9月1日現在、同党は150万人から200万人の党員を擁し、約3,000人の市 (町、区、村) 長、1,000人の市 (町、村) 会議員、600人の県あるいは郡会議員を同志に数えた。国会では、11人の議員団によって代表された。もし1939年に戦争が勃発しなかったならば、そして1940年に国会議員選挙があったならば、同党は100人近い代議士の誕生を期待することができたはずであった¹⁹⁴⁾。

8. 火の十字架団とフランス社会党 (PSF) はファシストか

火の十字架団とその後継組織のフランス社会党 (PSF) がファシストであったか否かについては、歴史家たちのあいだで大きく意見が分かれている。ルネ・レモン、セルジュ・ベルスタン、ピエール・ミルザ、フィリップ・マシュフェール、ミシェル・ヴィノック、ジャック・ノベクールなどフランスの歴史家たちのほとんどとフィリップ・ビュラン、ジュリアン・ジャクソンらが、火の十字架団とフランス社会党 (PSF) をファシストと呼ぶのは1930年代の左翼の貼りつけた党派的レッテルを無批判に採用することであり (ルネ・レモンは、1930年代、ド・ラ・ロックにファシズムの化身をみた左翼のフランス人は“とんでもない”間違いを犯した、と書いている¹⁹⁵⁾)、それらをファシストの部類に入れるのは不適切だと考える点で一致しているのにたいして、ロバート・サウシー、ウィリアム・アーヴィン、ケヴィン・パスモア、ゼーフ・ステルネルらは、それぞれの主張

¹⁹⁴⁾ Philippe Machefer, Sur quelques aspects des activités du colonel de La Rocque et du "Progrès Social Français" pendant la seconde guerre mondiale, *Revue d'histoire de la Deuxième Guerre mondiale*, 58, 1963, p.36.

¹⁹⁵⁾ René Rémond, *Notre Siècle, 1918-1988*, Fayard, Paris, 1988, pp.159, 216.

¹⁹²⁾ *Le Petit Journal*, 17 mai 1939.

¹⁹³⁾ Ph. Machefer, *Le Parti social français*, p.326.

にニュアンスがあっても、ド・ラ・ロックの運動をファシズムと分類している点では共通している。

両派の争点のいくつかをここで再検討してみたい。

ピエール・ミルザは、火の十字架団は、その団員の職業構成において中産階級が他の社会層よりはるかに高い比率を占めている点で、ファシスト団体とは異なると主張している。おそらく、マルセル・ビュキヤールのフランシスム、フランソワ・コティのフランス連帯団、ジャック・ドリオのフランス人民党などと比較して、そうだというのであろう。

1934年頃の火の十字架団の団員の職業構成をみるならば、ブルジョワジーと上級管理職が25パーセント、中産階級が41パーセント、技術者、事務労働者、第3次産業部門の従業員が合わせて28パーセントであり、農民は5パーセントにすぎなかった¹⁹⁶⁾。このように、農民はきわめて過小にしか代表されず、工場労働者にいたっては皆無に近く、反対に、小商人、「ホワイトカラー」、都市の富裕層が過大に代表されていた。この事実から、ミルザは、火の十字架団は「ファシスト団体より非庶民的でブルジョワ的な性格を呈していた」と結論している。しかし、中上流階級の過大代表、工場労働者の過小代表はイタリア国民ファシスト党とナチス両者のメンバーの社会的プロフィールの特徴でもあった¹⁹⁷⁾ことを考えれば、団員構成が非庶民的でブルジョワ的であったということをもって、火の十字架団がファシスト団体ではなかったとするのはむずかしい¹⁹⁸⁾。

しかしながら、この点にかんしては、人民戦線政府によって火の十字架団が解散させられた

あと結成されたフランス社会党 (PSF) が、第二次世界大戦前夜の数年間に飛躍的に党勢を拡大して、農村 (党員中の農民の比率は1937年初めに20パーセント、同年6月に23パーセント、1938年初めには25パーセント近くになった¹⁹⁹⁾) や自由業の分野にめざましく進出し、工場労働者のあいだにも地歩を固めはじめ、その党員の職業構成が大きく変わったことに注目しなければならない。人民戦線の支持者の一部が右翼に逆流したという状況のなかで、大戦前夜、フランス社会党 (PSF) は、階級の壁を越えた一大勢力になり、1938年にはおそらく80万人 (公称では1938年に200万人、1939年に300万人) の党員を擁して (その党員数はジャック・ドリオのフランス人民党——同党の絶頂期の党員数は10万人を越えていたとおもわれる——よりはるかに多く、共産党や社会党をも大きく凌駕していた)、地方に深く根を下ろし²⁰⁰⁾、合法的な選挙への参加の意志を表明して、フランス右翼のリーダーシップをねらう大政党のひとつとなっていたのである。

火の十字架団の非ファシスト的性格を論証するためにしばしばあげられるのは、1934年2月6日事件のときに示されたその「穏健な」行動と「合法主義」である。たしかに、その夜、火の十字架団のデモ隊は、セヌ左岸、ブルボン宮 (下院) の背後、アンヴァリード (廃兵院) とブルゴーニュ街とのあいだを整然と行進し、

¹⁹⁹⁾ P. Milza, *op. cit.*, p.138; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.1055. ウィリアム・アーヴィンがあげる数字では、1937年初めのフランス社会党 (PSF) の党員の職業構成は、工場労働者19パーセント、農民16パーセント、ホワイトカラー労働者24パーセント、中小企業経営者15パーセント、自由業26パーセントである。W. D. Irvine, *op. cit.*, pp.273-274.

²⁰⁰⁾ 第二次世界大戦前夜におけるフランス社会党 (PSF) の地方への党勢拡大については、Cf. Anne-Marie Chouvel, *Croix-de-Feu et PSF en Haute-Vienne*, mémoire de maîtrise, Université de Paris X-Nanterre, 1971; Jacques Prevosto, *Le PSF dans le Nord*, mémoire de maîtrise, Université de Paris X-Nanterre, 1971; P. Milza, *op. cit.*, p.139.

¹⁹⁶⁾ P. Milza, *op. cit.*, p.138.

¹⁹⁷⁾ Cf. Michael Kater, *The Nazi Party: A Social Profile of Members and Leaders, 1919-1945*, Cambridge, Massachusetts, 1983; Renzo de Felice, *Mussolini, Il Fascista*, Torino, 1966.

¹⁹⁸⁾ Cf. W. D. Irvine, *op. cit.*, p.273.

ブルゴーニュ街で通路を遮断していた一握りの共和国パリ衛兵隊の、非常線を突破してブルボン宮への攻撃を開始しようとはしなかった。しかし、イタリアのファシスト党もナチスも、完全に合法的な手段によって政権を獲得したのであるから、ド・ラ・ロックの「穏健な」態度や「合法主義」をもって、ただちに火の十字架団がファシストではなかったとすることはできないであろう²⁰¹⁾。

しかしながら、ド・ラ・ロックの「合法主義」がかれの組織内外からの激しい批判の原因となったことも事実であった。1935年までに、火の十字架団の多くの団員たちが、「腐敗した」政権と議会への攻撃を開始する「決行の時」を夢み、積年の病幣を一掃することを要求し、ド・ラ・ロックの極端に慎重な態度にいらだちをつのらせていった。

ド・ラ・ロックは、国民義勇軍の若い指導者たち、ド・モーデュイ、ポプラン、ピュシューらのまわりに集まった少数派の団員たちの反資本主義的で極右暴力主義的な計画を拒否し、その結果、1935年6-7月、かれらは火の十字架団を退団し、その多くはドリオのフランス人民党に走った。ド・ラ・ロックの運動は、ファシズムの教義と直接行動主義に魅惑された組織内の過激分子たちによって、あまりに軟弱で、保守主義に凝り固まっていると判断されたのであった。ド・ラ・ロックの共和制的合法主義の尊重に同意できなかった副委員長ポッツ・ディ・ボルゴも、火の十字架団退団後、カゲール団の指導者たちと行動を共にした。ド・ラ・ロックは、1936年、カゲール団の存在とそれが武器をストックしているテロリスト集団であることを知り、かれの支持者たちがカゲール団に加わるのを禁止した²⁰²⁾。

ド・ラ・ロックがピュシューらのプランに反対したのは、「このプランがブルジョワジーの支持者たちを不安がらせるのを恐れた」からであったとミルザが書いている²⁰³⁾のにたいして、アーヴィンは、この種の気づかいはファシスト政党においてもよくみられたものであり、ヒトラーもムッソリーニも、ラディカルな政党綱領の項目が機能不全に陥ったとき、それを放棄したように、すべてのファシスト政党の綱領は状況しだいで高度に御都合主義的であった、とのべている²⁰⁴⁾。しかし、ド・ラ・ロックが国民義勇軍の若手幹部たちの計画を拒否したのは、それがかれ自身の政策綱領と基本的性格において違っていたからであり、それは政策綱領の変更ではなく、御都合主義の所産でもなかった。その後、火の十字架団はフランス社会党 (PSF) になったが、それは極右同盟の解散が必要とした変化であり、合法政党への脱皮と大衆政党としての党勢拡大の要請は、当然、政策綱領の一部変更をともなったであろう。

また、アーヴィンは、1936年2月6日事件とムッソリーニが率いた武装行動隊のローマ進軍 (1922年10月) が、どちらも街頭の暴徒の行動が結果として内閣改造をもたらしたという点で似ていると指摘している²⁰⁵⁾が、しかし、ローマ進軍がムッソリーニの政権獲得を実現したのにたいして、2月6日夜の暴動は急進党主導内閣を中道派と右翼とが連合した保守党内閣に変えたただけであり (これらの事件の結果、ムッソリーニが政権奪取に成功し、ド・ラ・ロックにはそれができなかったという違いを、アーヴィンは、イタリア・ファシスト党と火の十字架団との違いよりも、イタリアとフランスの支配階層の違いによって説明しようとしているが)、なによりも、当夜の暴動を引き起こしたフラン

²⁰¹⁾ W. D. Irvine, *op. cit.*, p.275.

²⁰²⁾ R. Soucy, *op. cit.*, p.113, (traduction française) *op. cit.*, p.175; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.548-556.

²⁰³⁾ P. Milza, *op. cit.*, p.140

²⁰⁴⁾ W. D. Irvine, *op. cit.*, P.278.

²⁰⁵⁾ W. D. Irvine, *ibid.*, p.275.

スの極右同盟諸組織のあいだには緊密な連絡もなく、その活動を統括する強力な指導者の存在もなかったという点で、2つの事件には大きな違いがあった。

それでは、ド・ラ・ロックは、街頭運動をつうじて政権を奪取することをまったく考えてはいなかったのであろうか。そうとはいいがたい。しかし、確かなことは、この点にかんするド・ラ・ロック自身の言説がきわめてあいまいであったということである。一方で、ド・ラ・ロックは早まった行動をたえず非難したが、他方で、「決行の時」とか「非常待機」などという大げさな表現法をつうじて、かれの支持者たちを動員しようとした²⁰⁶⁾。

1935年に公開された著書『公共の奉仕』のなかで、ド・ラ・ロックは、1934年2月6日の暴動を擁護し、それは、社会主義者たちの策謀に反対する誠実な人びとの反乱であり、第三共和制の腐敗した政治家たちをもっと高い理想をもった選良たちに取り替えねばならないという必要を示したもので、この必要は、墮落した政治屋どもがまだ追放されていない以上、いまま全面的な現実性を持ち、恐慌と長引く不況もたらす経済的衝撃（国庫の支払い停止、株式市況の崩壊、多数の銀行の突然の閉鎖）が「暴発」を引き起こし、火の十字架団を政権の座に就けさせるようになるのは、もはや時間の問題にすぎないとのべている。そして、2月6日事件は議会制の「全面的破産」によって引き起こされたものであり、これまでのような政策で国を統治しつづけるかぎり、ふたたび「爆薬」が爆発する危険があるだろう、と主張した²⁰⁷⁾。激しい街頭運動によって政権を奪取することを正当化したこのような主張は、のちに、いっさいの街頭暴力を非難し、選挙をつうじて政権の譲

渡を考えるようになる人物の言説とはおもわれなかった。

火の十字架団は軍隊式に編成された「ディスポ」とよばれる戦闘部隊をもち、ド・ラ・ロックは、1934年、これらの部隊が「厳格な規律」に従い、「前へ！」という命令の言葉——それは、第一次世界大戦中、フランスの兵士たちが敵を攻撃するときに使用した言葉であった——に新しい価値を吹き込んだとほめたたえた²⁰⁸⁾。軍隊用語は、本来、在郷軍人団体を母体にして発展した火の十字架団の精神をよくあらわすものであった。

1935年6月、アルジェでの集会でド・ラ・ロックは、「今日、わたしは、固い決心のもとに、あなた方に、きわめて短期間のうちに、われわれをフランス人のフランスに導くための、なにものにも止められない攻撃の決意を話すためにきました²⁰⁹⁾」と明言し、その2週間後、アルジェで、火の十字架団北アフリカ支部執行委員会のメンバーのひとりドベールは、約600人の聴衆を前にして、「楽しんでる時間は終わり、行動に移る時がもうすぐ訪れよう」と告げ、「決行の時」がこの夏か1935年の最後の四半期のあいだにやってくるので、火の十字架団の全団員は連絡を密にしていなければならない、とつけ加えた²¹⁰⁾。

一方、フランス本土に帰ったド・ラ・ロックは、1935年6月13日、メッツの集会で、現在の議会制度の終わりが近いことを告げ、10月か11月に、国会が巨額の赤字の予算案を採決しなければならない瞬間にその危機が訪れるであろうと予言し、「火の十字架団の決行の時が到来し、われわれの理想がひとたび権力をえたならば、そのときこそ、わが団体は国を組織し直す

²⁰⁶⁾ K. Passmore, *From Liberalism to Fascism. The Right in a French Province, 1928-1939*, p.229.

²⁰⁷⁾ F. de La Rocque, *Service public*, pp.109-111.

²⁰⁸⁾ *Le Temps*, 27 janvier 1935; F. de La Rocque, *Service public*, p.23.

²⁰⁹⁾ *La Dépêche algérienne*, 11 juin 1935.

²¹⁰⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 13241, 23 juin 1935; R. Soucy, *op. cit.*, p.171, (traduction française) *op. cit.*, pp.249-250.

ために必要な手はずを整えるであろう²¹¹⁾』と説明した。

1935年7月初めの警察の一報告を信ずるならば、ド・ラ・ロックは、「火の十字架団が政権を奪取した場合に、政府の中核を構成する」専門委員会の設置に取りかかり、警察のトップに据えるべき人物、陸相、外相などの政府の重要ポストにふさわしい人物を選んでいたという。また、同時期の別の報告は、ド・ラ・ロックの支持者たちが、かれらの組織がまさに政府を支配下に置こうとしていると信じていると指摘している²¹²⁾。

けれども、夏が去り、秋も過ぎ、冬が訪れても、クーデタのかすかな気配もなかった。「決行の時」が近いことを告げた演説にもかかわらず、ド・ラ・ロックは、それを行動に移す命令を出そうとはしなかった。クーデタを成功させるには、民衆の支持と軍隊の支援が欠けているということがド・ラ・ロックには分かっていたからであろうか、あるいは、共産党や社会党だけでなく、急進党の大部分の黨員たちのあいだにも、反ファシズムの感情が広がっていた1935年秋の政治状況が、かれの戦術を行動に移すには不利だ、と判断したからであろうか²¹³⁾。かれは、フランスにおける極右運動の弱さを自覚していたのであろう。ド・ラ・ロックは、「早まった」行動は火の十字架団を人民戦線の仕掛けた罠に陥らせると主張し、これに反対した²¹⁴⁾。ゼーフ・ステルネルの表現によれば、「攻撃開始の時」をほのめかしながらも、「火の十字架団の首領は、まるで、自分の部隊を難

攻不落の砦の攻撃に差し向けようとはしない慎重で老練な軍人のようであった²¹⁵⁾。』

回顧的にみれば、ド・ラ・ロックのクーデタの脅しは、政治的誇張法以外のなものでもなかったと結論することができるかもしれない。実際には、かれはそれを「決行」しなかったからである。この結論と、ド・ラ・ロックとその部下たちが、1934年から1936年までに、「決行の時」をめざして、演説のなかで、また、火の十字架団がいく度も組織した動員の予行演習をつうじて、政府にたいして激しい非難と脅威の言葉を繰り返し投げつけたという事実とを和合させるのはむずかしいが、しかし、結局、ド・ラ・ロックは、2月6日事件のときと同様に、けっしてルビコン川を渡ろうとはしなかったのである。6年後のヴィシー政権時代に、ド・ラ・ロックは、この時期をふりかえって、内戦に発展するのを恐れて、クーデタを起こすのを自制したのだと主張している²¹⁶⁾。

ド・ラ・ロックがファシストではないという解釈は、かれがその運動組織をファシストではないと繰り返しいつづけ、また、1930年代をつうじて、かれがドイツのナチズムを繰り返し批判した事実によっても、支持されるようにおもわれる。

1934年4月、2月6日事件にかんする下院調査委員会に証言のため召喚されたさい、ド・ラ・ロックは、かれをファシスト呼ばわりするのは「愚かしい」ことだといった。もっと正確にいうようにと要求されたとき、かれは「あな

²¹¹⁾ Archives Nationales, F⁷ 13241, Metz, 15 juin 1935; R. Soucy, *ibid.*, p.171, (traduction française) *ibid.*, p.250.

²¹²⁾ Archives Nationales, F⁷ 13241, 3 et 8 juillet 1935; R. Soucy, *ibid.*, pp.171-172, (traduction française) *ibid.*, pp.250-251.

²¹³⁾ 1935年8月17日、ド・ラ・ロックは、『ル・フランボー』紙に、「人民戦線の広がりについて、われわれは防衛的姿勢を守りつづける」と書いている。Le Flambeau, 17 août 1935.

²¹⁴⁾ F. de La Rocque, *Service public*, pp.9-13, 261; Le Flambeau, 18 juillet 1935.

²¹⁵⁾ Z. Sternhell, *op. cit.*, p.90. そして、ゼーフ・ステルネルは、「火の十字架団が力による対決をしようとしなかったのは、合法性を尊重したからではなく、共和体制が抵抗する決意を示したからであった」とのべている。Ibid, p.92.

²¹⁶⁾ 「われわれは、人民戦線のデマゴギーに陶醉した群衆からと、政府の命令通りに動く警察、軍隊などの公権力からの、二重の衝撃に耐えなければならなかったであろう。“赤”の勝利は確実であった」とド・ラ・ロックは注釈している。François de La Rocque, *Disciplines d'action*, Editions de Petit Journal, Clermont-Ferrand, 1941, pp.29-30.

た方がムッソリーニとヒトラーの書いたものすべてをごらんになり…それをわたしの書いた穏やかな文章と比較されたならば、違いがはっきりとお分かりになるでしょう」と答え、火の十字架団は、「軍事体制のもくろみ」を擁護したことは一度もなく、「ファシズムの思想全体」を排除し、フランスの個人主義は「ファシスト的解決策には向いていない」と考えている、とつけ加えた²¹⁷⁾。

1936年には、ド・ラ・ロックは、自分は「共和主義の自由に強い愛着を抱いている」と明言し、フランスの歴史は「ファシストの独裁、ヒトラーの独裁、ソ連・マルクス主義の非人間的隷属」を排除してきたとのべた²¹⁸⁾。1936年4月11日の『ル・フランボー』紙では、ド・ラ・ロックは、火の十字架団を支持することによって、ファシズムやヒトラー主義だけでなく、そのあとに続いて不可避的に起こる赤色革命をも避けることができるとのべ、6月13日の同紙では、火の十字架団は、いかなる場合も、「ヒトラー主義、反ユダヤ主義あるいはユダヤ人、資本主義あるいは共産主義のいずれによるファシズム独裁」も望んではいけないとのべた²¹⁹⁾。

また、ド・ラ・ロックは、火の十字架団もフランス社会党 (PSF) も、外国的なもの、とりわけ「ドイツの蛮行」とはまったく無縁であることを強調し、1933年5月には、『ル・フランボー』紙は、ヒトラーとその仲間たちを「野蛮な集団」とよんだ。1934年7月には、ドイツで、ヒトラーの政権掌握1年後、なお高い失業率、物価騰貴、ナチス幹部の地位あさりなどにたいする不満が表面化し、レーム幕僚長が率い

る突撃隊のあいだにもヒトラーへの失望感が広まったが、突撃隊反乱の情報——それは事実ではなかった——を聞いたヒトラーがレームをはじめ突撃隊幹部を逮捕して、裁判もなしに射殺し、100人近い反対派や邪魔者を親衛隊に殺害させたとき、同紙は、この事件とナチスの「暴政と異端糾問制度」を激しく非難した。

1936年1月1日、『ル・フランボー』紙掲載の一論説は、ヒトラーの政権掌握3年目のナチス体制の経済的成果を批判して、失業は減少したけれども、食糧や消費財の生産は減退し、その一方で、税金が高くなり、「社会的負担が重くなった」と指摘している。4月18日と25日にも、ナチズムを批判した論説が掲載され、そのひとつはナチスの人種差別を非難し、他のひとつは、ドイツでもっとも急速に発展している工業は軍需産業であり、そこに職をえられない失業者たちは軍隊にはいる以外に生きる手だてはなく、それがヨーロッパの平和にたいする脅威となっていると主張している。『ル・フランボー』紙はまた、大衆教育と体育のためにエリート文化と知的業績を犠牲にしているナチスの教育制度を非難し、とりわけ、軍服を着て教授たちを威嚇しているドイツの学生を厳しく批判した²²⁰⁾。

1937年5月には、ド・ラ・ロックは「ファシズムお断り」と題した論説を発表し、ファシズムは「フランス人の気質に反して」いて、フランス社会党 (PSF) は「ファシズムの全体主義の盲従的な模倣²²¹⁾」にはいっさい反対であることを強調した。同年7月には、ド・ラ・ロックはふたたびファシズムを非難し、「ブルムよりヒトラーの方がましだ」というスローガンに反対し、かれの運動組織はあらゆる形態の独裁に反対であり、「自由の理想とキリスト教文明擁護のため、われわれはヒトラーのくびきとモス

²¹⁷⁾ Chambre des députés, *Rapport fait au nom de la commission d'enquête chargée de rechercher les causes et les origines des événements du 6 février 1934*, op. cit., no.3383 (2-3), p.1623.

²¹⁸⁾ Cit. par Paul Creyssel, *Le Parti Social Français devant les problèmes de l'heure: rapports présentés au premier congrès national du PSF*, Société d'éditions et d'abonnement, Paris, décembre 1936, p.406.

²¹⁹⁾ *Le Flambeau*, 11 avril et 13 juin 1936.

²²⁰⁾ *Le Flambeau*, 1^{er} février, 18 et 25 avril 1936.

²²¹⁾ Cit. par R. Soucy, op. cit., p.139, (traduction française) op. cit., p.209.

クワの暴政の双方とも拒否する」とのべ、フランス社会党（PSF）は共和主義の合法性を尊重し、その価値を守り、個人の権利の自由な行使を約束し、「独裁体制のいっさいの模倣には断固反対する²²²⁾」と言明した。

著者『公共の奉仕』のなかでは、ド・ラ・ロックは、ナチスの人種理論を批判し、ドイツが「最悪の狂気」に身を任せようとしている——ド・ラ・ロックはそれをドイツが「ラテン民族の節度の感覚」に欠けていることに起因すると考えていた——ことを非難した。政治的暴力にたいするナチスの特別な好みは社会的、知的無秩序の徴候であり、フランスでこのような暴力を使用すれば、「ひどく嫌悪すべき事態か、きわめて滑稽な状況」を招くであろう、とド・ラ・ロックは書いている。ド・ラ・ロックの批判は、イタリアのファシズムをも容赦せず、火の十字架団は、イタリア国民ファシスト党の「軍服の濫用」や「ほとんど宗教的な」国家崇拜には賛成せず、また、「もし統制も拘束もない権力の座に居坐ったひとりの人物あるいは一グループの人物たちの手に絶対的権力が任ねられたならば、わが国のような文明国も最悪の危険を冒すことになるであろう²²³⁾」とかれは書いている。

もしムッソリーニとヒトラーの体制にたいするあからさまな共感をファシストに必要な資格とするならば、あきらかにド・ラ・ロックはその資格に欠けていたということができよう。

しかし、別の面もあった。ド・ラ・ロックと火の十字架団の幹部たちが、イタリアのファシズムとドイツのナチズムを称賛することもあった。火の十字架団がドイツやイタリアのファシズム運動に部分的に同調したのは、とりわけ、ヒトラーとムッソリーニによって実行されたマルクス主義者の弾圧にたいしてであった。共産主義者の取り扱い方においては、民主的な保守

主義国家よりも、ナチズムとイタリアのファシズムのほうが効率的であることをかれらは認めざるをえなかった。

ドイツの工業を戦時編成にし、エリート文化を崩壊させたとしてナチズムを非難した『ル・フランボー』紙（1936年4月25日号）の同じ論説は、ヒトラーが「敗戦と社会主義によって粉々にされたドイツの断片を寄せ集め」、ビスマルクさえなしとげられなかったドイツ全体の統一を実現したことに賛辞を呈した。この論説の執筆者にとっては、ヒトラーは「聡明で、抜け目がなく、精力的で、大胆で、誠実な」人物であり、ナチズムが「裏返しにされたボルシェヴィズムの一種」であるとしても、しかし、ナチズムとボルシェヴィズムとのあいだにはなお大きな違いが存在し、ロシアにくらべればドイツは「幸福な」国であった。同論説はまた、ムッソリーニが文学と芸術を奨励し、「民衆の政党であるファシズムが群衆をエリートの高さにまで引き上げようと努力している」と称賛した²²⁴⁾。

『公共の奉仕』のなかでは、ド・ラ・ロックは、ムッソリーニの「天賦の才」について語り、「ムッソリーニが称賛に値するということには、異義を差し挟む余地がない²²⁵⁾」と言明し、フランスとイタリア両国は「同一の知的系譜²²⁶⁾」をもつとして、両国間の同盟を勧告した。また、かれは、ドイツ国民がなしとげた「疲れを知らぬ戦後復興」を称賛し、「フランスにおける革命の陰謀に終止符を打ち、陸海空軍の連携を堅密にし、その基礎を堅固に固めたのち」ヒトラーとの協調を求めようフランス国民に勧告した²²⁷⁾。1935年9月には、『ル・フランボー』紙は、イタリアとの「大陸的連帯」を呼びかけ、フランスとドイツとのあらたな戦

²²⁴⁾ *Le Flambeau*, 25 avril 1936.

²²⁵⁾ F. de La Rocque, *Service public*, p.177.

²²⁶⁾ F. de La Rocque, *ibid.*, p.177.

²²⁷⁾ F. de La Rocque, *ibid.*, p.180.

²²²⁾ *Le Petit Journal*, 14 juillet 1937.

²²³⁾ F. de La Rocque, *Service public*, pp.179, 256, 260–262.

争をそそのかすことによって、パリとローマとの断交を引き起こそうとして、国際的陰謀を企てているフリーメイソンと共産主義者を非難した²²⁸⁾。

火の十字架団のメンバーのなかにはファシズムに共感を抱くものがすくなくならずいたことはたしかであり、なかでも副委員長のポッツ・ディ・ボルゴはムッソリーニとヒトラーの最大の礼賛者であった。

警察の報告によると、人民戦線の政権掌握前夜の1936年5月、パリで開かれた火の十字架団の地方集会で、ポッツ・ディ・ボルゴは、ムッソリーニが、「フリーメイソン団体の脅しにもかかわらず、その目的を實現した」「偉大な指導者」であるといい、その4日後の別の集会では、ヒトラーをも同様に称賛した。「フランスがいまや危機に瀕していると聴衆に訴えたあと、ディ・ボルゴは、“祖国”という観念を持ち上げ、それを象徴するものとして、ヒトラーの業績を、すなわち、戦争に敗れ、打ちのめされ、行く先を見失った国に急速に勝者の魂をあたえた業績をあげた。ディ・ボルゴは、ムッソリーニも、ヒトラーと同じく、いかにすればかれの国を偉大な国家にできるかをよく知り、だれもいまだ匹敵できないような偉業をなしとげること成功したと言明した²²⁹⁾」と警察の報告はのべ、この言葉は聴衆のあいだに万雷の拍手喝采を引き起こしたとつけ加えている。

ポッツ・ディ・ボルゴは、しかしながら、ド・ラ・ロックの共和制的合法主義の戦略に反対して、1936年6月、火の十字架団を去った。ディ・ボルゴとかれと考えをともにした直接行動主義のメンバーの脱退によって、ド・ラ・

ロックの組織が大きく変わった(ルネ・レモン、ジュリアン・ジャクソン²³⁰⁾)ことも事実であった。

けれども、ポッツ・ディ・ボルゴたちの離反によって、火の十字架団のファシスト分子が一掃されたわけではなかった。1936年6月末に結成されたフランス社会党(PSF)が合法的議政党政党への道を踏み出したあとも、アルザス地方での入党者たちのなかには、かつてフランシスムやその他のファシスト団体に属していたものが多数いたことがあきらかにされている²³¹⁾。

ヒトラーのファシズムは根底的に人種差別主義であり、ユダヤ人はナチスの悪魔学のなかで中心的な役割を当てがわれた。しかしながら、反ユダヤ主義をすべてのファシズムにたいするリトマス試験紙として使用することはできない²³²⁾。イタリアのファシズムは、政権掌握後の最初の15年間は、人種差別主義ではなく、反ユダヤ主義でもなく、ユダヤ人排斥法がイタリアに導入されたのは、1936年になってにすぎなかった²³³⁾。1930年代のフランスでは、もっとも

²³¹⁾ Sam Huston Goodfellow, *Fascist or Conservative? The Croix-de-feu/PSF in Alsace*, Annual Conference of the Western Society for French Historical Studies, October 15, 1993; R. Soucy, *op. cit.*, pp.142-143, (traduction française) *op. cit.*, pp.213-214. 1938年4月9日、アルザス地方のフランス社会党(PSF)機関紙『ル・フランボー・ド・レスト』は、ヒトラーが「ブルジョワジーの金銭登録機能的メンタリティーと社会主義者たちの祖国観念の欠如を痛撃し、これによってドイツ民族の統一を實現した」国家社会主義をつくりあげたことを称賛し、「階級間の分裂と憎悪に終止符を打とうと望むなら、あらためて国民の統一の實現に努力することがわれわれの義務ではないか」と結んでいる。サム・グッドフェローによれば、ヒトラーの姿勢にたいする「羨望をほとんど包みかくさず」表明したこの種の表現は、アルザス地方のフランス社会党(PSF)の機関紙や同党の地方新聞ではふつうのことであったという。また、1938年には、アルザス地方のフランス社会党(PSF)には、反ユダヤ主義の分子たちが存在していた。

²³²⁾ R. Soucy, *op. cit.*, pp.12-13, 152, (traduction française) *op. cit.*, pp.38-40, 226; Pascal Ory, *Du fascisme*, Perrin, Paris, 2003, pp.26, 191-192, 288.

²³³⁾ Susan Zuccotti, *The Italians and the Holocaust*, Lincoln, New York, 1987, pp.23-38.

²²⁸⁾ *Le Flambeau*, 21 septembre 1935.

²²⁹⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 13983, 16 et 20 mai 1936; R. Soucy, *op. cit.*, pp.141-142, (traduction française) *op. cit.*, p.212.

²³⁰⁾ R. Rémond, *Les Droites en France*, quatrième édition, p.214; J. Jackson, *op. cit.*, p.253, 向井・岩村・振津訳, pp.288-289.

反ユダヤ主義的であった2つの極右同盟のリーダー、シャルル・モーラス（アクション・フランセーズ）とジャン・ルノー（フランス連帯団）でさえも、生物学的な反ユダヤ主義を擁護しようとはしなかった。しかし、ド・ラ・ロックのナチズム批判の重要な理由のひとつが、そのユダヤ人排斥にあったことも見逃すことはできない。

1934年、ド・ラ・ロックは、火の十字架団は、階級間の協調のために階級闘争を拒否するのとまったく同様に、人種間の協力のために人種的紛争を拒否するとよく主張した。火の十字架団、フランス社会党（PSF）のメンバーのなかには、指導的幹部のひとりフェルディナン・ロップその他のユダヤ人がいて、ド・ラ・ロックは非左翼ユダヤ人の加盟を歓迎し、これにたいして、アクション・フランセーズは、一度ならず、ド・ラ・ロックの「ユダヤ人好き」を非難した。

『公共の奉仕』のなかの「民族問題」と題した章において、ド・ラ・ロックは、フランスの独自性を犠牲にして、ドイツの体制を模倣するというような、無能きわまりない企てをしてはならないと読者に警告を発している。「人種差別主義」という語は「醜悪な新語」で、フランス人が、ローマ時代以来、人種の混交をつくりだしてきたさまざまな民族の連続的な侵入の産物であるという事実を無視した「人工的な概念」であるとド・ラ・ロックはいい、フランス国民が、外国の多くの国ぐにからやってきて、「その民族的、言語的起源を忘れ」、フランスの土地に「溶け込んだ」人びとからつくられているのにたいして、ドイツ人は、傲岸にも、「もっとも非人間的な行動」を正当化するために、「神はわれわれとともにあり」という言葉をでっちあげたのだとべている²³⁴⁾。そして、「ヒトラー主義とその暴挙は、遠からず、物笑

いと非難の波をかぶって終わりを告げるであろう」と書いている²³⁵⁾。

ド・ラ・ロックによれば、人種差別主義は人間の良識と自然の攝理に反するだけでなく、第一次世界大戦中フランスのために命を投げ出したユダヤ人兵士を辱めるものでもあった。「もし狂気にとらわれた政府が、みずからの血を流してフランスの大地に合体した人びとを、フランスという共同体から引きはがそうなどとするならば、わが国の死者たちは、その英雄的な墓石の底から抗議の声をあげるであろう。フランス民族はみごとな総合なのである…それは、ひとつの全体である。いかなる言語学的研究も、いかなる遺伝学的分析も、この事実に勝るものはない。地理的起源や宗教的信念にかんするいかなる考察も、これに介入することはできない²³⁶⁾」とド・ラ・ロックは書いている。

けれども、火の十字架団とフランス社会党（PSF）のすべてのメンバーが反ユダヤ主義を拒否したわけではなかった。警察の一報告によれば、1937年6月、アルジェリアでのフランス社会党（PSF）の集会の最中、聴衆のひとりが「くたばれ、ユダヤ人！」と叫んで、ド・ラ・ロックの演説を妨害した。ド・ラ・ロックは「静粛にしたまえ。いまは宗教が問題ではない」と応答した。このやりとりを目撃していたひとりの反ユダヤ主義者は、ド・ラ・ロックの態度を恥知らずだといったという²³⁷⁾。

1937年には、アルジェリアでは、ジャック・ドリオのフランス人民党がフランス社会党（PSF）の最大のライヴァルであり、ドリオはド・ラ・ロックがユダヤ人にたいしてあまりにも寛容な政策をとっていることを非難して、フランス社会党（PSF）に打撃を加えようとした。攻撃を仕掛けたのは、アルジェリアにおけ

²³⁵⁾ F. de La Rocque, *ibid.*, pp.160-161.

²³⁶⁾ F. de La Rocque, *ibid.*, p.157.

²³⁷⁾ *Archives de la préfecture de police de Paris*, PSF, 22 juin 1937; R. Soucy, *op. cit.*, p.155, (traduction française) *op. cit.*, p.230.

²³⁴⁾ F. de La Rocque, *Service public*, pp.199, 154-155.

るフランス人民党の責任者ヴィクトル・アリギであった。

この事実については、ウィリアム・アーヴィンが以下のような独自の解釈をしている。「アルジェリアでは、右翼全体が反ユダヤ主義であった。1870年以後市民権をあたえられたアルジェリアのユダヤ人は、アルジェリアの選挙区、とくにコンスタンティーヌで、堅固でかなり重要な左翼ブロックを形成していた…このような選挙区の情勢からもっとも過激な結論を引き出したのが、ヴィクトル・アリギであった。ドリオの真剣な戦術的自制にもかかわらず…アリギは、オランであからさまな反ユダヤ主義キャンペーンを開始した…アリギのあからさまで敵意に満ちた反ユダヤ主義は、フランス社会党 (PSF) にたいするかれ個人の宿怨のためでもあった…フランス社会党 (PSF) にたいするかれのいらだちは、同党が選挙協力に無関係な立場をとりつづけたことに起因していた。ドリオが“モスクワの給料支払い名簿から製鉄協会の給料支払い名簿に移った”とフランス社会党 (PSF) から非難されて完全に頭にきたアリギは、ド・ラ・ロックの分裂性の行動はユダヤ人のせいであると逆襲した…実際には、ド・ラ・ロックのユダヤ人好きにたいするアリギの非難は、アルジェリアのフランス社会党 (PSF) についても、ド・ラ・ロック中佐についても、まったく不当なものであったといえよう。フランス社会党 (PSF) の地方支部は、その機関紙も認めていたように、つねに“選挙のときは反ユダヤ主義”であった…アルジェリアのフランス社会党 (PSF) から圧力をかけられたド・ラ・ロックは、“わたしは、コンスタンティーヌのわれわれの友人たちが、今後、ユダヤ人社会のメンバーとのいっさいの商業的あるいは政治的關係を断つよう断固主張する”と言明した…ド・ラ・ロックはコンスタンティーヌのユダヤ人の大量虐殺をしようとおもったわけではなく、たんに経済的排斥運動をしようとしただけ

であった。たしかに、1938年の最後の10か月間、オランのフランス人民党は、フランス社会党 (PSF) より明白で激しい人種差別主義者であった。しかし、1939年初めにアリギがフランス人民党を去ったあとは、オランのフランス人民党の反ユダヤ主義の傾向は顕著ではなくなり、これとは反対に、フランス社会党 (PSF) はせつせとユダヤ人“差別”を続けたのである²³⁸⁾。」

また、アルザス地方のフランス社会党 (PSF) 機関紙『ル・フランボー・ド・レスト』は、第二次レオン・ブルム内閣が財政・経済再建法案を下院に提出する前の1938年4月2日、ユダヤ人の首相レオン・ブルムが、ナチス・ドイツの国章かぎ十字の代わりにダヴィデの星で飾られたナチスの制服を着用して、革製の軍靴を履いた数千人のユダヤ人が「ひとつの民族、ひとつの国家、ひとりの總統、ハイル・ブルム！」と叫ぶ前で、ナチス式敬礼をしている悪趣味な漫画を掲載した。さらに、つぎの号では、ユダヤ人は基本的に劣等民族である、なぜならユダヤ人は「経済的ハゲタカ」だからだという同紙論説委員の主張を掲載した。アルザスにおける反ユダヤ主義の表現は、これが最初ではなかった。1936年の選挙戦のときにも、同地方のフランス社会党 (PSF) は、ミュルーズで、「ユダヤ人はあなた方の両親を殺し、あなた方の財産を奪い、あなた方の民族を毒殺する」とアルザス地方の人びとに警告したポスターを街中の壁に貼りつけたという事実があった。

ド・ラ・ロック自身も、1936年9月19日の『ル・フランボー・ド・レスト』紙上で、「キリスト教徒でない人びと、他民族の人びと」の権利を擁護し、公式には反ユダヤ主義を拒否しながらも、レオン・ブルムに率いられた「ユダヤ人のごろつきども」という表現を使って、ア

²³⁸⁾ W. D. Irvine, op. cit., pp.292-293.

ルザス地方の反ユダヤ主義に追従したとおもわれるふしがあり、アルザス地方のファシズム運動を論じたサム・ヒューストン・グッドフェローによれば、「アルザス地方の人びとは、ド・ラ・ロックがかれらの反ユダヤ主義を支持していると信じていた²³⁹⁾。」

ロバート・サウシーは、ド・ラ・ロックが、1930年代末になって、アルザスとアルジェリアの反ユダヤ主義に同調する姿勢を示したのは、おそらく、ドリオのフランス人民党がその人気を高めようとして反ユダヤ主義を利用しはじめたからであったろうと書いている²⁴⁰⁾が、それはすこし違うであろう。ド・ラ・ロックにアルザスとアルジェリアの反ユダヤ主義への迎合があったとしても、かれの攻撃の矛先はつねに左翼のユダヤ人に限られていたのである。

1935年11月、極右同盟の解散問題をめぐって国会で激しい議論が交されたのは、リモージュで共産党と火の十字架団との乱闘があったあとであり、ド・ラ・ロックは、国会での火の十字架団のスポークスマンであったイバルネギャレーをつうじて、政府の鎮静化措置を受け入れた。こうして、ラヴァル内閣は武装戦闘集団と私的民兵組織の解散を予告する法案を提出することができたのであり、同法案は下院と上院によって最終的に採択され、1936年1月10日公布された。

1936年6月、人民戦線政府によってこの法律が適用され、極右同盟が解散させられたあと、火の十字架団は非合法的な反体制組織に変わることはなかった。反対に、ド・ラ・ロックは大衆的な議会政党、フランス社会党 (PSF) を誕生させ、右翼保守勢力の統合者になろうとした。それまで火の十字架団のプロパガンダに反感をもっていた社会層の人びとのあいだにも党勢を

浸透させようとして、ド・ラ・ロックはその政策綱領の一部を変更し、農民層（かれらはやがてフランス社会党の党員の4分の1を占めるようになる）には——ドルジュールと同様に（ドルジュールとド・ラ・ロックとの2つの組織が根を下ろした地域はほぼ同一であり、両組織は農業労働者のストライキに反対して一緒にたたかうことになった）——単一相続人に遺贈される「家族の財産」の保護を提案し、小商人と職人には、大資本にたいして家族の仕事場の保護者として振舞い、労働者には、家族保護政策と最低賃金の保証を約束した。それらの共通分母は激しい反共産主義であり、「モスクワの党」にたいする宣戦布告であった。

火の十字架団という極右同盟に代えてフランス社会党 (PSF) という合法政党を結成し、選挙制度を受け入れたことは、ド・ラ・ロックのファシズム拒否の証拠である、とピエール・ミルザは主張している²⁴¹⁾。しかし、ただちにそう主張することはむずかしい。もし、そのように推論するならば、ヒトラーもムッソリーニも、かれらの組織が国会議員の選挙に候補者を立てはじめたとき、ファシストではなくなったということになる²⁴²⁾。ド・ラ・ロック自身、すでにのべたように、1935年から1936年にかけての冬に書かれたとおもわれる文章で、火の十字架団が長期的な展望のなかで選挙の審判を受ける合法政党になることの必要を説明し、「普通選挙を軽蔑し、政権を奪取するためにもっぱらロマンチックな暴力的手段に頼るとするのは、西ヨーロッパの大国では、もはや検討に値しない考え方である。ムッソリーニもヒトラーも、かれらの極端な教義にもかかわらず、このようなまちがった考えに陥ることはなかった。とりわけナチスは、選挙によって絶対的な権力にまで

²³⁹⁾ Sam Huston Goodfellow, *Fascism in Alsace, 1918-1945*, Ph. D. thesis, Indiana University, 1991, pp.424-428.

²⁴⁰⁾ R. Soucy, *op. cit.*, p.157, (traduction française) *op. cit.*, p.233.

²⁴¹⁾ P. Milza, *op. cit.*, p.141.

²⁴²⁾ W. D. Irvine, *op. cit.*, p.277; R. Soucy, *op. cit.*, p.151, (traduction française) *op. cit.*, p.224.

はい上がったのである…ナチスは、1929年、国会に107人の同党議員を送り入れた日に、はじめて卓越した政治勢力になったのである²⁴³⁾」とのべていた。

極右同盟から古典的タイプの政党組織への変化は、左翼の人間の目には、たんなるカムフラージュと映った。しかしながら、フランス社会党 (PSF) の火の十字架団との継続的性格を主張して²⁴⁴⁾、両者の非連続面に目を向けなければ、それは事実をみないことになろう。たしかに、結成当初には、ド・ラ・ロックやフランス社会党 (PSF) の指導者たちは火の十字架団との連続性を否定せず、むしろ、それを強調した²⁴⁵⁾、まもなく、その連続性を否定するようないくつかの重要な徴候があらわれた。

火の十字架団の絶対的信念を信じ、共和制的合法主義を尊重する政治運動への参加に同意できなかった旧メンバーの少数派は新党に加わらなかった。それに代わって数十万の新しいメンバーが殺到し、かれらは新しい組織の下部を構成し、「民主主義の実習」を経験した。ド・ラ・ロックの運動には、とくに軍隊的方法の使用において、ファシズム・モデルからの伝染がみられたが、火の十字架団の軍隊式の「デイスポ」の組織は改組されて軍隊的性格を弱め、やがて、火の十字架団時代のようなスタイルのデモも姿を消した。フランス社会党 (PSF) が選挙に候補者を立て、国会内に議員団を結成したのは、結党後の一連の事件の動きから判断して、「政党の複数体制による民主主義の慣行へ

の復帰」であったとみる²⁴⁶⁾ができよう。

こうして、合法的大衆政党になることをめざして、フランス社会党 (PSF) は、急進党の領分を荒らそうとし、戦闘的な反共産主義と——火の十字架団時代よりは力強く——反資本主義を標榜して、人民戦線に期待を裏切られた人びとを引き寄せようとしたのであった。この反共、反資本主義の両面でのたたかいかいによって、ド・ラ・ロックは、左翼からは、保守的穏健右翼とは対立するナンバー・ワンのファシストとみなされ、逆に、ファシストや王党派の目には、背教者で、軽蔑すべき議会主義の救い主と映ったのであった。いずれにせよ、選挙の民主主義的原理に帰順したフランス社会党 (PSF) は、第二次世界大戦勃発に先立つ2年間に、およそ100万人の党員を擁し、堅密な支部組織網をもつフランス右翼最大の政党となったのであった²⁴⁷⁾。

ド・ラ・ロックの議会民主主義への帰依を疑う²⁴⁸⁾ことはできよう。しかし、フランス社会党 (PSF) が国会内でも大きな勢力になるはるか手前で、軍事的敗北によって、フランスの共和制議会民主主義そのものが崩壊してしまっただけに、いっそう、その疑いを証明するに足る確たる根拠をみつけることもむずかしいのである。

なによりも、ド・ラ・ロックの運動をファシズムとよぶのをむずかしくしているのは、そのイデオロギーである²⁴⁹⁾。ド・ラ・ロックの運動

²⁴³⁾ Archives Nationales, fonds privés 451, dossier 81, no.162, «Les Croix de feu devant le problème des élections», pp.3-5.

²⁴⁴⁾ W. D. Irvine, op. cit., pp.272, 277; Z. Sternhell, op. cit., pp.84, 92.

²⁴⁵⁾ 1938年になっても、カンヌ支部の機関紙『ル・フランボー・ド・カンヌ』が、「われわれは火の十字架団の輝かしい絶対的信念の継承者である」と書いているが、それは結成当初のフランス社会党 (PSF) の機関紙の言葉を繰り返したものであった。Le Flambeau de Cannes, 1^{er} mars 1938.

²⁴⁶⁾ R. Rémond, *Notre Siècle, 1918-1988*, pp.105, 216.

²⁴⁷⁾ R. Rémond, *Les Droites en France*, quatrième édition, pp.214-215.

²⁴⁸⁾ R. Soucy, op. cit., 116, 144, 147, 161-162, (traduction française) op. cit., pp.179, 215, 219, 238.

²⁴⁹⁾ 「火の十字架団の指導者のなかにファシストをみるのは、不適切である…ド・ラ・ロックの政策綱領は、もっとも伝統的な反動的、保守的源泉から引き出されたものである」(フィリップ・ビュラン)。Philippe Burrin, *La dérive fasciste, Doriot, Déat, Bergery, 1933-1945*, Le Seuil, Paris, 1986, pp.191-192. Cf. P. Milza, op. cit., pp.133, 136; W. D. Irvine, op. cit., pp.278-279.

は1936年以前も以後もファシズムではないと主張しているジュリアン・シャクソンは、つぎのように書いている。「軍隊式パレード、自動車の隊列行進、“決行の時”へのなぞめいた言及などがそのメンバーの一部にファシスト的身震いをさせたとしても、著書『公共の奉仕』のなかに要約されたような、ド・ラ・ロックのイデオロギーは、家族の擁護、国家の権威の強化、階級協調、労使協調主義（コーポラティズム）など、伝統的な保守主義の思想の月並みなコレクションである。これらのどこにも、かならずしも反共和主義的なものではなく、それはまったくファシズムではない。労使協調主義（コーポラティズム）の包攝は、最良の社会的キリスト教の伝統のなかにあるものである²⁵⁰⁾。」同じく、フィリップ・マシュフェールも、火の十字架団の教義は、ファシズムにではなく、「一種の愛国的、社会的キリスト教」に基礎を置いていた、と主張している²⁵¹⁾。

火の十字架団時代のド・ラ・ロックのイデオロギーのかなりの部分は、第一次世界大戦以前のナショナリズムと反議会主義の伝統のなかにとどまっていたといえる。新しい要素としては、激しい反共産主義があったが、しかし、それも他の右翼団体と違いはなかった。ド・ラ・ロックの支持者たちは、支配者階級の腐敗分子を非難したが、しかし、ブルジョワ的秩序やその経済的基盤を問題にすることはなかった。

ド・ラ・ロックがいかなる社会をつくろうとしていたのかは、著書『公共の奉仕』や機関紙『ル・フランボー』に発表されたかれの論説から知ることができる。イデオロギーというよりは、むしろ政策綱領というべきド・ラ・ロックの著作は、塹壕の戦友愛が国民的和解の基礎として役立つという感情にもとづいた火の十字架

団の絶対的信念を敷衍し、国民を分裂させるいっさいのもの——階級闘争、たんなる政党体制に墮落してしまった議会主義、利益誘導型の政治手法、公職の買収に帰着する職業政治等々——をはっきりと拒否している。

ド・ラ・ロックは、『カンディード』紙とのインタビュー（1935年1月1日号²⁵²⁾）のなかで、「社会的進歩の追求」によって動かされた「左翼の情熱的な力」と、「ナショナルであろうとする情熱」によって動かされた「右翼の生気を蘇らせる力」との「自然な結合」を呼びかけている。もちろん、この場合、「左翼」と「右翼」という語にあたえられているのは狭義の政治学的意味ではなく、「左翼」とは「運動」の陣営を、「右翼」とは「秩序」の陣営を意味したと理解できよう。ド・ラ・ロックにとっては、「保守主義者も、共産主義者と同様に、われわれがフランスに打ち立てたいとおもっている社会秩序の敵」であった。

それでは、ド・ラ・ロックが打ち立てようとしていたのは、どのような社会秩序なのか。

ド・ラ・ロックが望んでいた社会秩序を支える壁となるのは「組織的職業」——ド・ラ・ロックは「労資協調主義 (corporatisme)」という語より「組織的職業 (profession organisée)」という語を好んだ——であり、その基礎には、政治的義務から解放され、したがって政治的ウイルスにおかされず、本来の職業的目的にのみ立ち返った「組合」——労働組合と企業家組合——があり、これらの労働組合と企業家組合とのあいだでは、地方レベルから地域、全国レベルまで、たえず協議できるよう、協力と提携がはかられなければならないとしていた。「組合」間の協調は、市（町村）、郡、地域など行政区分の各段階に設置された助言機関によって円滑化され、それらの頂点には、諮問機関としての経済審議会が立法機関と並んで置か

²⁵⁰⁾ J. Jackson, *op. cit.*, p.253, 向井・岩村・振津訳, p.288.

²⁵¹⁾ Ph. Machefer, *Sur quelques aspects des activités du colonel de La Rocque et du "Progrès Social Français" pendant la seconde guerre mondiale*, pp.38-39.

²⁵²⁾ *Candide*, 1^{er} janvier 1935.

れるべきであった。「経済」と「政治」とが機能させる建造物の穹窿となるのが「社会」であり、「組織的職業」がそれを支える壁であった。

「組織的職業」には、社会福祉制度の管理から産業立地や人口の再配分まで、家内工業の保護から小農地の近代化まで、住宅政策からレジャー組織まで、きわめて広範な権限があたえられ、もっとも広義の国防と治安以外は、その権限の及ばない分野はなかった。

このような主張は、ファシズムのプログラムのなかにもみいだされる主張であったが、しかし、同時に、当時のフランスの政治風景の一部を占めていた「国民的結合²⁵³⁾」のすべてのイデオロギーのなかにもみいだされる主張であった。そこには、ファシズムのさまざまなヴァリエーション——とくにナチズム——との不一致点も多く、その不一致点は、ときには基本的性格にかかわるものであった²⁵⁴⁾。

まず、外国モデルの拒否と、フランス国民の特質だけでなく自然の攝理にも反するとみなされた、人種差別にたいするはつきりと表明された非難があった。つぎに、火の十字架団のイデオロギーは、全体主義にも国家統制にも反対であり、この点では、アクション・フランセーズのイデオロギーに近かった。

ド・ラ・ロックが理想とした社会の骨組みは地方分権、地方尊重に基盤を置いていた。「集産主義でもなく、絶対主義でもなく、自由主義でもない²⁵⁵⁾」国家は、あらゆる段階での協力を

調整することを使命とし、個人や集団のインシヤティヴを調停し、原理的な国家干渉主義をとまなうことなく、それらを共同体の必要に適合させるために、その権威を行使するのである。

ド・ラ・ロックが、「同業組合(corporation)」や「労資協調主義(corporatisme)」という語ではなく、「組織的職業(profession organisée)」という語を使用したのは、「同業組合」という語がアンシャン・レジーム期やイタリアのファシズムをおもわせるからであったろう。事実、イタリアのファシスト政権は、「同業組合」を国家と一体化した単一政党に奉仕させたのであり、ファシズムのイタリアでは「同業組合」が国家統制の道具そのものであった²⁵⁶⁾のにたいして、ド・ラ・ロックの「組織的職業」は、このような国家統制には反対であった²⁵⁷⁾。

ド・ラ・ロックは、とりわけ、かれが望む政治体制を具体的にあきらかにするという問題では、あいまいな態度を示したが、かれが望ましいと考えていたのは、行政権を強化し、議会の役割を減らしはするが、しかし、国民の代表としての議会の機能をできるだけ尊重するという国家形態であった。かれは、比例代表制と女性に選挙権を認める「公正な」投票方式にたいしても賛意を表明した。しかし、ストライキの権利には反対し、また、すべての政治勢力から独

²⁵⁶⁾ フランス社会党(PSF)の労資協調主義(コーポラティズム)は、それぞれの職業が「国家の絶対的圧政の下ではなく」、それ固有の限定的な領分のなかで、経営者と労働者との協力の原則にしたがって機能するという理由で、イタリアのファシズムとは根本的に異なる、とポール・クレセルが1936年に主張している。P. Creyssel, *op. cit.*, pp.78-79.

²⁵⁷⁾ 火の十字架団の指導的幹部のひとりシャルル・ヴァランはつぎのように解説している。「“組織的職業”は、これとはまったく違った着想の、イタリアあるいはドイツで適用され、通常“労資協調組合主義(コーポラティズム)”とよばれている方式とは無縁である。イタリアあるいはドイツ流の“労資協調組合”は、国家(あるいは国家と一体化した政権政党)に経済活動への直接的で恒常的な干渉権をあたえる、全体主義的な職業組織である。われわれのいう“組織的職業”は、このような国家の監督を拒否する。」*Le Petit Journal*, 21 janvier 1938.

²⁵³⁾ Cf. Philippe Burrin, *La France dans le champs magnétique des fascismes*, *Le Débat*, no.32, novembre 1984, pp.52-53. 竹岡敬温「フランス・ファシズムの思想と行動(1)」『大阪大学経済学』第55巻第1号, 2005年6月, p.24.

²⁵⁴⁾ P. Milza, *op. cit.*, pp.136-137.

²⁵⁵⁾ ド・ラ・ロックは、自由主義の教義を無責任で寄生的な資本主義の発展を許すものとして拒絶し、国家が調査、調停、処罰の任務に当たるよう要求した。F. de la Rocque, *Service public*, pp.134-140, 148; *Le Flambeau*, 1^{er} janvier 1935; K. Passmore, *From Liberalism to Fascism. The Right in a French Province, 1928-1938*, pp.238-239.

立した私学の宗教教育が政府によって助成されることを望んだ。

要するに、「家族」と「企業」という——ともに伝統的で家父長主義のモデルに従って形成された——2つの基礎的細胞のうえに、在郷軍人の友愛精神によって再生された理想の国を打ち立てたいというのが、火の十字架団の教義であった。テイラー主義と「野蛮な資本主義」に反対し、「大企業」にたいして「小企業」の保護を訴えたド・ラ・ロックは、強力な家族保護政策を勧告すると同時に、社会的鎮静化と国民的和解の見地から、最低賃金制の実施を要求した。労働者には、経済変動に左右されず、家族を養うことのできる賃金を受け取る権利、企業利潤分与の権利、有給休暇の権利をあたえ、資本と労働が協力することをつよく勧告した。

このようなド・ラ・ロックの思想は、当時の社会的カトリック教の影響圏のなかにみいだされるものであった²⁵⁸⁾。『公共の奉仕』が発表されたと同じ年、社会的カトリック教とフランスのキリスト教民主主義者の社会では、同業組合や労資協調主義国家、自由主義と社会主義とのあいだの「第三の道」にかんする議論が展開されていた。

精神と人間性の優位、自由主義・集産主義・経済の専横にたいする反対、金の力の横暴の拒否、家族から企業や国民までの「自然共同体」の再生など、『公共の奉仕』と社会的カトリック教との基本的着想は同一であった。ド・ラ・

ロックもまた、1930年代のヨーロッパの多くの知識人たちと同様に、自由資本主義とマルクス主義的社会主義とのあいだの「第三の道」を探索したのであった。

このように、火の十字架団の信念がキリスト教の伝統、精神的なものの優位と伝統的道徳価値を重視していたことを考えれば、ド・ラ・ロックの運動は、「ファシズム」をおもわせるより以上に、愛国的な社会的カトリック信仰のもとづいた「社会的キリスト教国家」をおもわせるものであったろう。こうして、ジャンヌ・ダルクやシャルル・ペギーらの全国的に高名な人物へのたえざる言及、ド・ラ・ロックと多くの団員たちの戦闘的なキリスト教信仰、家父長主義的社会行動（無料診療所、慈善バザー、林間・臨海学校等々）、スポーツへの関心（スポーツ教育協会、飛行クラブ）などが軍隊の崇拜、フランスの植民地開発事業の支持、健全な冒険とヒロイズムの賛美に加わったのである²⁵⁹⁾。これらすべてによって判断するならば、火の十字架団をファシズムの武装集団と同列に扱うのは躊躇せざるをえない。

ゼーフ・ステルネルは、ド・ラ・ロックがかれの望んだ社会秩序の礎石とした「組織的職業」は、ファシズムにいきつく自由主義とマルクス主義とのあいだのあの“第三の道”を指示するための規範語であり、ド・ラ・ロックの名著『公共の奉仕』のイデオロギーは「ファシズム思想の古典的枠組のなかに含まれる」と主張している²⁶⁰⁾。しかし、「第三の道」は、第一次世界大戦後の新しい状況に適應するため、ヨーロッパの知識人や政治家たちのあいだで広く共有された、多形的な探求にもとづく広範な

²⁵⁸⁾ ただし、火の十字架団の理想が伝統的なカトリック教の家父長主義をあらわしていたというピエール・ミルザの主張にたいして、ケビン・パスモアは、ド・ラ・ロックが社会的カトリック教の世界で流布していた思想の影響を受けていたことは明白であったとしながらも、1930年代には、社会的カトリック教の伝統は細かく分かれ、伝統的家父長主義に反対する要素をも含むようになっていたと反論し、社会的カトリック教の若干の種類は、ポピュリズムや反共産主義と結合して、急進的右翼と密接な関係をもつまでになった、と主張している。P. Milza, *op. cit.*, p.237; K. Passmore, *From Liberalism to Fascism. The Right in a French Province, 1928-1939*, p.237.

²⁵⁹⁾ 火の十字架団のこのような活動をルネ・レモンは「大人のための政治的ボーイ・スカウト運動」とよび、ピエール・ミルザは「両大戦間のカトリック教青年組織と、とりわけボーイ・スカウトの精神の政治的延長」と表現している。R. Rémond, *Les Droites en France*, quatrième édition, p.214; P. Milza, *op. cit.*, pp.137-138.

再生への渴望を表現した主張であり、ファシズムはその極端なひとつのヴァリエーションにすぎなかったものであり、ステルネルのド・ラ・ロック批判はファシズムの拡大解釈にもとづいていた。

1937年2月、ドミニコ会の週刊紙『セト』の記者とのインタビューで、フランス社会党（PSF）の政策綱領を解説したド・ラ・ロックは、いっそう明示的にカトリック教会の社会的教義とかれの主張との親近関係について語り、フランス社会党（PSF）の思想的根幹は「われわれの西洋文明はキリスト教文明である」という原理にあると述べている。とはいっても、フランス社会党（PSF）は宗教政党ではなかった。フランス社会党（PSF）がつねに宗教政党の外観を避けようとした理由を、ド・ラ・ロックはインタビューのなかでつぎのように説明している。「キリスト教文明の基準は、フランス社会党（PSF）のすべての党员によって、かれらの宗教がなんであれ、また、信仰をもっていようというまいと、受け入れられています。わたしたちの成功の理由は、おそらくそこにあります。わたしたちの力は、“カトリック教会の長女”という祖国の特質から生まれたものです。わたしはといえば——それは個人的な問題なのですが——わたしはカトリックです……わたしの信仰は、わたしの公的な行動と一致しています。わたしはこの信仰とわたしに信頼を寄せてくれている人びとにふさわしくあろうと努力しています。しかし、わたしは、宗教の宣伝者となるのみならず禁じています。それは、

²⁶⁰⁾ Z. Sternhell, *op. cit.*, p.87. ゼーフ・ステルネルは、1980年に発表した論文では、火の十字架団は「けってファシズムの運動ではなかった」、なぜなら「フランスでは、真のファシズムはつねに左翼で生まれ、右翼で生まれたのではなかったからである」と書いていたが、その後、考えを変えたようである。Zeev Sternhell, *Precursors of Fascism in France; The Continuity with the Pre-World War I Traditions*, in Stein Larsen ed., *Who were the Fascists? Social Roots of European Fascism*, Universitetsforlaget, Bergen, 1980, p.495.

さまざまな宗教の人びとを相互に結びつけなければならないというわたしの任務のためなのです。」フランス社会党（PSF）は「キリスト教の影響を受けた」政党であったが、しかし、「キリスト教の政党」ではなかった。

また、あなたは共和主義者かと問われて、ド・ラ・ロックは、フランス社会党（PSF）は「憲法によってすべての市民に保証された公民権と政治的権利を行使して、合法的手段」を守り、共和制の秩序を犯したりはしないと答え、「わたしは共和主義者です」と断言している。ド・ラ・ロックは、さらに、労働する権利、最低賃金制、賃金計算への家族的要因の導入、既婚女性が家庭にとどまることができるための家族手当、有給休暇、利益分配への労働者の参加など、「労働者の権利」を力説し、最後に、「わたしたちは、カトリック教会の社会的教義に真理のすぐれた表現を期待しています。すべての宗教的勢力の協力がなければ、いかなる新しい秩序も長続きすることはないでしょう」とのべてインタビューを締めくくっている²⁶¹⁾。

ド・ラ・ロックはカトリック教会に助けを求めたり、火の十字架団、ついでフランス社会党（PSF）を信仰表明のなかに投げ入れたりすることはなく、かれ自身の信仰を運動の旗幟として振りかざそうとはしなかった。しかし、かれの基本的思想はキリスト教によってはぐくまれ、1930年代における社会的再生と政治的刷新の運動のなかで、反議会主義の空隙——あるいは政治の腐敗にたいする失望——を埋めるため、ひとつのユートピア、「キリスト教ナショナルイズム」というユートピアに頼ったのであつ

²⁶¹⁾ *Sept*, 26 février 1937. ド・ラ・ロックとのインタビューを記事にした『セト』紙の記者の名は、第二次世界大戦後、ミシェル・アブレと分かったが、かれはピエール・フォレストのペン・ネームで『ル・フランボー』紙、ついで『ル・プティ・ジュールナル』紙の記事を書いていた人物で、ド・ラ・ロックの側近の協力者であり、『セト』紙のインタビュー記事を曲げて書いたという可能性は小さい。J. Nobécourt, *op. cit.*, p.347.

た。

ド・ラ・ロックの運動の思想的基礎に「キリスト教ナショナリズム」があったといえるのは、かれがフランスという共同体をそれがキリスト教文明の一員であるという事実を具現したものとみなしたからである。しかし、このような思想は、もし極限にまで押し進めれば、異質な要素の排除にみちびき、潜在的な全体主義をもたらす危険があるであろう²⁶²⁾。

このような陥穽を避けるために、ド・ラ・ロックは「精神的価値」の重要性を強調した。それらの「精神的価値」は、現実の野蛮な力関係と利害関係を調整するため、友愛関係の確立を義務として課すことによって、階級闘争を終わらせ、社会的「分裂」に対置された「和解」と「結合」の建造物として機能するものであり、また、既成秩序、個人主義の支配、金の横暴な力、政党体制の腐敗を克服し、ナチズムと

共産主義、物質主義のイデオロギーを非難するものであった²⁶³⁾。

長く潜在的な「フランスのムッソリーニ」と疑われたド・ラ・ロックは、1940年のフランス敗北後、最初は、ペタン元帥の下、初期ヴィシー政権の政策を（留保つきで）支持²⁶⁴⁾し、対独協力の原則にも同意した²⁶⁵⁾が、1942年にはレジスタンス運動に参加し、翌年、ゲシュタポに逮捕されて強制収容所に送られた。1945年、戦争終結とともに釈放され、フランスに戻ったが、1940-1942年の対独協力支持のため、戦後フランスの新政権によって投獄された。1946年には出獄したが、まもなく（1946年4月）、収容所生活による健康悪化が原因で死亡した。

（大阪大学名誉教授）

²⁶²⁾ ゼーフ・ステルネルも、ド・ラ・ロックのイデオロギーの中心に「キリスト教ナショナリズム」があったとしているが、かれは「キリスト教ナショナリズム」を「反自由主義的、権威主義的で、既成秩序の破壊を招く」と表現している。Z. Sternhell, *Ni droite ni gauche. L'Idéologie fasciste en France*, p.87.

²⁶³⁾ Cf. J. Nobécourt, *op. cit.*, p.965.

²⁶⁴⁾ Cf. Ph. Machefer, *Sur quelques aspects de l'activité du colonel de La Rocque et du "Progrès Social Français" pendant la seconde guerre mondiale*, *op. cit.*

²⁶⁵⁾ Jean-Pierre Azéma, *De Munich à la Libération, 1938-1944, Nouvelle Histoire de la France contemporaine*, vol.14, Le Seuil, Paris, pp.221-222.

D'une ligue au parti parlementaire. Une étude sur les Croix de feu et le Parti social français (PSF)

Yukiharu Takeoka

En France la crise économique, déclenchée au début des années 1930, a apporté le triomphe du cartel des gauches à l'élection du mai 1932, qui a débouché sur la prise de pouvoir par le parti radical. Pourtant, les gouvernements successifs du parti radical se sont révélés impuissants à vaincre le marasme économique. A la fin de 1933 sont mis au jour les escroqueries de Stavisky, qui ont compromis plusieurs hommes politiques. Les affaires Stavisky ont conduit, le 6 février 1934, à l'attentat des ligues d'extrême droite sur la Chambre des députés qui s'est développé en émeute sanglante, suivie par la résignation hâtée du ministre Daladier et la formation du ministère de l'union nationale. C'est l'épreuve la plus dramatique qu'essuyât Paris depuis la Commune de 1871.

Les partis de gauche ont interprété cette émeute du 6 février comme événement suscité par les intrigues des fascistes. Il a fallu attendre la publication d'un article de René Rémond intitulé «Y a-t-il un fascisme français?» et de son livre sur *La Droite en France* à la décennie 1950 pour que soit remis en question le schéma, hérité parmi les forces de gauche, des impératifs simplificateurs du combat antifasciste.

La parution des ouvrages de René Rémond a renforcé le consensus des historiens universitaires français pour lesquels il n'y a eu de fascisme français que marginal pendant l'entre-deux-guerres.

Mais, la tentative d'interprétation du fascisme français d'un historien israélien Zeev Sternhell (*Maurice Barrès et le nationalisme français*, 1972; *La droite révolutionnaire. Les origines françaises du fascisme*, 1978; *Ni droite ni gauche. L'idéologie fasciste en France*, 1983) qui considère que le fascisme français a été un phénomène de première importance et qu'il a pu dès avant 1914 servir de matrice à ses homologues italien et allemand a ravivé le débat sur l'existence d'un fascisme à la française.

Dans cet article, nous avons traité les Croix de feu et le Parti social français (PSF).

Les Croix de feu, dirigés par le lieutenant-colonel François de La Rocque, étaient le mouvement le plus représentatif d'extrême droite en France d'entre-deux-guerres. Le gouvernement du Front populaire, qui a pris le pouvoir par suite de son triomphe aux élections législatives en mai 1936, a dissous, sans retard, toutes les ligues de formations paramilitaires, y compris les Croix de Feu.

Les décrets de dissolution ont ouvert à La Rocque la voie de l'action politique légale, aboutissement nécessaire de la transformation des Croix de feu. La Rocque a créé le Parti social français (PSF) à la fin de juin 1936.

Juillet 1936-juin 1940, c'était la période de ce que La Rocque a défini comme «le fait PSF», soit la présence dans le champ politique de la formation de masse créée sous le nom de Parti social français.

Nous avons examiné, en particulier, si on peut qualifier de fasciste le mouvement des Croix de feu et du Parti social français (PSF), en étudiant l'idéologie et l'action de ces deux organisations dans le climat politique et social en France des années 1930.